

平成17年度 [第17-K1510-01号]
二級河川巴川（麻機遊水地）河川調査に伴う風土・史跡調査業務委託

報 告 書

平成18年3月

静岡県静岡土木事務所

目 次

| | | |
|-----|---------------|----|
| 1 | 調査の目的 | 1 |
| 2 | 調査内容 | 2 |
| 3 | 調査体系 | 2 |
| 4 | 調 査 | 4 |
| 4-1 | 調査概要 | 4 |
| 4-2 | 麻機遊水地の地理的な理解 | 11 |
| 1) | 地形・地質の資料整理 | 11 |
| 2) | 最近の調査から言えること | 19 |
| 4-3 | 麻機遊水地周辺と人の関わり | 23 |
| 1) | 居住環境の資料整理 | 23 |
| 4-4 | 麻機遊水地の風土・史跡 | 40 |
| 1) | 風土の資料整理 | 40 |

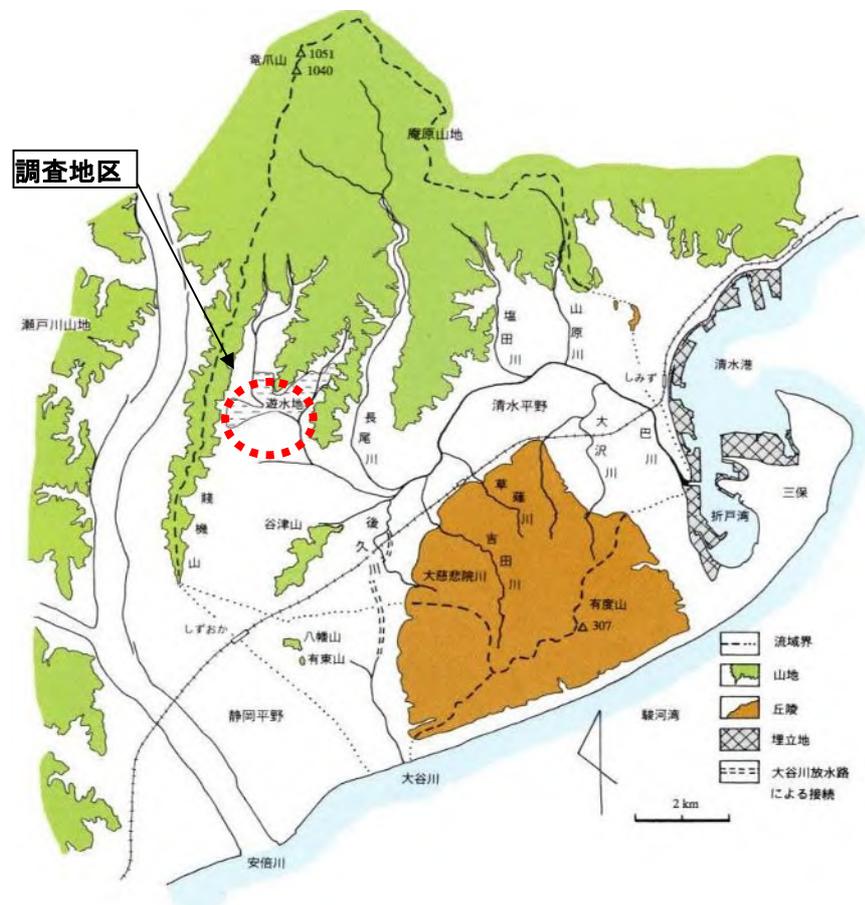
1 調査の目的

麻機遊水地は、もともと低地であった地理的条件を生かし巴川の洪水を調整するものであり、その築造前後において、地域住民との関わりが非常に強いところであった。

現在、麻機遊水地の自然をテーマにした資料は比較的整理され、容易に手に入れることはできるものの、人との関わりに関する、とりわけ麻機遊水地を取り巻く風土（歴史、文化、地名、伝説・伝承、文化財など）となると、資料が散在している状況にある。

このため、風土に関わる資料を収集・整理するとともに、治水上の安全を図る原点として、なぜ、そこが低地だったのか地理的条件を明らかにし、なぜその周辺に人が居住したのか等を専門家等にヒアリングし、今後、策定を予定している「巴川水系河川整備基本方針」及び「巴川水系河川整備計画」への反映や、川と親しむための地域活動に活用する基礎資料とする。

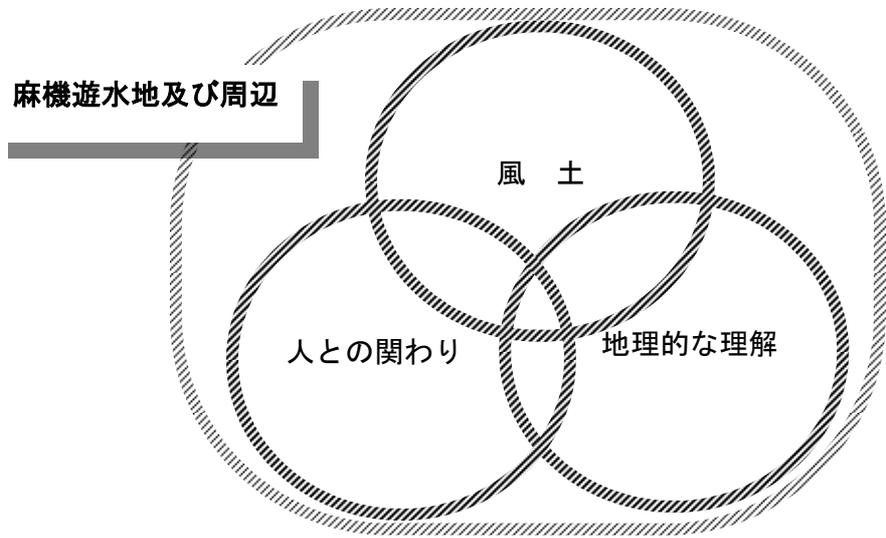
■調査地区の位置



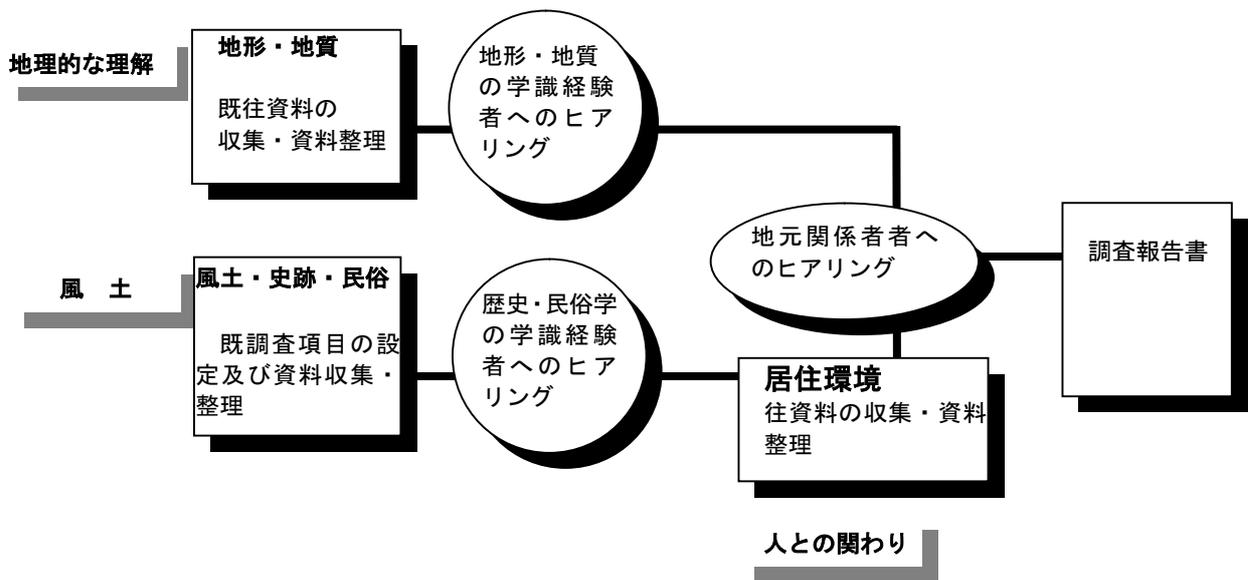
図：記念誌大谷川放水路

2 調査の内容

- 1) 麻機遊水地の地理的な理解
 - ①地形・地質に関する資料収集・整理を行う。
 - ②地形・地質の学識経験者へのヒアリングを行う。
 - 2) 麻機遊水地周辺と人との関わり
 - ①居住環境に関する資料収集・整理を行う。
 - 3) 麻機遊水地の風土・史跡
 - ①目的を踏まえた風土・史跡に関する調査項目を設定し、資料収集・整理を行う。
 - ②麻機周辺で主に活動している地元住民、文化有識者等からの懇談会形式のヒアリングを行う。
 - ③歴史・民俗学の学識経験者へのヒアリングを行う。
- 注) 麻機地区を中心に資料収集・整理し、麻機遊水池に係る地区について必要に応じて資料収集・整理を行う。



3 調査体系



●地理的な理解、人との関わり、風土の調査項目の設定

| 項 目 | | 分類 |
|--------|--------|--------------|
| 地理的な理解 | 地形・地質等 | 地形・地質 |
| | | 沼の誕生と河川形状 |
| 人との関わり | 居住環境 | 市街地 |
| | | 地区の地勢 |
| | | 地区の歴史 |
| | 水 害 | 市街地の変遷 |
| | | 水害の歴史 |
| | 交 通 | 巴川の治水 |
| 船運 | | |
| 風 土 | 地名・伝説等 | 道路と交通 |
| | | 地名 |
| | 史 跡 | 伝説・民話・昔話等 |
| | | 文化財 |
| | 社寺仏閣 | 寺院 |
| | | 神社 |
| | 暮らし | 産業 |
| | | 民俗（産業に関わるもの） |
| | | 信仰 |
| | | 年中行事 |
| | | 食生活 |
| | | 麻機沼の暮らし |
| | | 麻機的生活 |
| | 教育 | |
| 風 景 | 景観 | |

4 調査

4-1 調査概要

調査は、麻機地区を中心に、既往資料を項目別に整理し、概要を紹介する。

特に、地質については、静岡大学名誉教授土隆一先生に内容を見て頂区と共に加筆を、民俗については、静岡産業大学情報学部教授中村羊一郎先生に「記念誌大谷川放水路」の内容を再度見直していただきました。

また、麻機村塾、麻機農協北支店婦人部の方々から地元の生活・暮らしなどの意見を聞いた。

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|--------|-----------|--|-------------------------------|
| 地形・地質等 | 地形・地質 | <p>麻機遊水地は、静岡平野の北部の山地と西側に突出する賤機山等を背景にした扇状地である。</p> <p>麻機遊水地第4工区東縁近くの深さ14.6mのシルト層中から合弁の二枚貝ハイガイが1個体（縄文時代前期6720±6014 Cy. B. P）と、近くのシルト層中から巻貝化石カワアイ2個体を得ることができた。これら貝化石が得られたことによって、清水港から当時“古麻機湾”が8km以上も西へ延びていたことや、その奥の海岸にはハイガイやカワアイが生息するような砂泥底がひろがっていた情景であることが明らかとなった。</p> | 記念誌大谷川放水路 静岡名誉教授土先生の調査コメント |
| | 沼の誕生と河川形状 | <p>麻機遊水地付近は縄文時代（約6000年前）には清水から麻機に至る奥深い入江になっていたが、弥生時代以降には、ほぼ現在の海水面になった。</p> <p>麻機低地のすぐ北側の山地は流域も狭く、土砂をあまり運ばなかったことにより、南端の標高28mという高い扇状地の頂点から流れた表流水や扇状地末端から湧き出した伏流水が標高6mという最も低い所に集まって麻機沼を造ったと推察される。</p> <p>このため、もともと低地であったところに安倍川の本流が乱流し、流れは低地を縫うようにして清水方面に流れ、巴の字のように、蛇行していた。</p> <p>さらに、江戸時代になると徳川家康によって駿府城が築造され、薩摩土手が造られたために安倍川の水量が減少し、下流では長尾川や吉田川から流出した土砂が堆積し、流れが衰え麻機沼ができたと言われている。</p> | 記念誌大谷川放水路 |
| 市街地 | 地区の地勢 | <p>【麻機地区】</p> <p>麻機地区は、静岡市市街地の北方、約8kmにあり、北に標高1,104mの文珠岳を控え、その南縁の山々に囲まれ、西は、岬半島状の賤機山地が突出し、安倍川筋と境を接し、特に、南は広汎な沖積地が展開している。また、かつて低湿沖積地には、浅畑沼を始め、小沼、武平淵など沼や低湿地が散在していた。</p> <p>近郊農村として、静岡市街地からはむしろ偏在的位置にあったが、最近、巴川改修、耕地の区画整理の完成に伴う道路整備による市街地までの時間短縮化や一般住宅地や団地造成によることから、静岡市北部のベットタウンとしての地域性格を形成している。</p> | 麻機誌 |

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|-----|--------|---|--|
| 市街地 | 地区の地勢 | <p>【千代田地区】</p> <p>千代田地区は静岡市街地の東北部を占め、麻機地区と隣接している。その大部分は平野で、一部は山地・河谷である。平野部は安倍川扇状地の後背湿地で、浅畑沼に発して清水港に注ぐ巴川の本支流が葉脈状をなしている。地区の南部を北街道が東西に走っている。これに沿って西から都市化が急速に進み、市街地を形成している。</p> <p>北部は郊外を隔て山間地につながり、長尾川が東の境界をなしている。長尾川の中流部河谷に沿って、山懐深くまで集落が点在している。</p> <p>区域の北側にある龍爪山は郷土の北を囲み、寒気を遮って温暖な気候をもたらす。八合目に穂積神社が鎮座している。</p> <p>千代田の基盤は農耕社会であり、地域は山村と平地村との二つに分けられ、そこには山の暮らしと野の暮らしがある。土地の人々はたがい「山家（やまが）」、「田所（たどころ）」と呼び合ってきた。生活様式は風土の特性と有機的に結びついた、きわめて生態系的なものである。</p> | 千代田誌 |
| | 麻機の歴史 | 麻機及び周辺に古墳、史跡等の発見や日本武尊伝説があり、古い歴史を持つ。 | 麻機誌 |
| | 市街地の変遷 | <p>麻機村、千代田村は、昭和9年に旧静岡市（明治22年4月1日に市制を施行）に編入した。</p> <p>巴川流域で市街地の変遷を見ると、昭和30年以降急速に市街地の開発が進み、昭和30年には21%にすぎなかった市街地が昭和45年には33%、昭和55年には39%、平成6年には50%までにも達している。これらの開発は、山間部ではなく、低地部の開発がほとんどである。</p> <p>麻機遊水地周辺も、明治・大正期には麻機遊水地周辺には幾つかの集落の分布がみられていたが、昭和55年には既成市街地と連坦した。平成6年には既成市街地の北側外縁部にも市街化が進行していることがわかる。</p> | 麻機誌 |
| 水害 | 水害の歴史 | <p>地形的な特異性から、古くから水害を受け、江戸時代に河川改修が行われている。</p> <p>麻機誌の歴史をみると、明治から大正にかけ、ほぼ毎年大洪水に見舞われている。</p> | 麻機誌 |
| | 巴川の治水 | <p>巴川の治水は、江戸時代から大規模な巴川の浚渫や流れを変える工事が行われてきたが、おそらく慶長十八年（1613）徳川頼宣の命によるものが最古のものである。</p> <p>江戸時代は、川の自普請（工事）により、村の自前事業であった。</p> <p>明治期も自前事業が続き、組合を設立して事業を行っていた。</p> <p>組合費と水害の続発により、村は二重苦となり、県に陳情し、昭和3年県の河川法準用河川に認定される。</p> <p>戦後の食糧増産を目指した土地改良事業によって良好な水田となった。</p> <p>昭和40年から50年頃には高度経済成長とともに巴川流域の市街化が進み、台風などの大雨によって浸水被害が発生するようになった。</p> <p>昭和49年7月7日から8日にかけて発生した「七夕豪雨」は巴川流域の総合治水対策事業への取り組みの契機となりました。</p> <p>河川整備区間により、工法が変わる</p> | 麻機誌 「麻機遊水地に蘇る生きものたち」（静岡県静岡土木事務所平成13年） |

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|----|-------|--|-----------|
| 交通 | 船運 | <p>駿河誌によると、巴川の舟運開発は、慶長年間に手を付けている。</p> <p>駿河志科（新宮高平著）では、清水・静岡の輸送路が「官許」されていた。</p> <p>寛政9年（1797）には「お堀の水を農業用水に使用されることをから、水落～横内川～巴川の水路啓開を願いでている。</p> <p>天保14年（1843）清水～巴川～横内川～駿府の通船ルートは清水湊が駿府の外港としての役割を持った。また、清水湊～蒲原浜～富士川～甲府ルートにも通じている。</p> <p>この時代大事業である巴川通船路の再開発が企画され、通船水路の石垣が近くの村の山々から切り出された。</p> <p>しかし、水野忠邦の改革も挫折しこの工事も「御指留」となった。</p> <p>巴川沿岸は湿田であるため、住民は舟（農家は耕作船を持っていた）を利用することが多く、田植えともなれば、女は舟に乗り、男が細い道や畦道から舟を曳いていく。</p> <p>舟の耐用年数は約10年であり、駿府の商人や金貸しから10年賦の借金で造った。</p> | 麻機誌 |
| | | <p>一般の通行や、米穀、醤油などの貨物輸送には、耕作船を使うことは禁止され、長さ8m余、幅約1mの「小廻り船」と言われる5石舟を利用し、舟は一目でそれとわかるように、赤い布を付けた竹竿を、舳先に立てていた。</p> <p>昭和12年頃まで、巴川などで舟を利用していた。</p> | 麻機誌 |
| | 巴川運河 | <p>権力基盤を固めるうえで家康が描いた計画では、駿府城に海から直接物を運び込むための運河を造るはずだった。実際、駿府城の石垣を築くために周辺の山から切り出された大量の石の一部は長尾川の上流から川をつかって運ばれている。</p> <p>江尻から巴川をさかのぼれば上土までは舟が入る。だからこの構内川を拡幅すれば運河になる、という計画であった。</p> <p>ところが工事に着手すると同時に大量の水が吹き出し、成功の見込みは皆無、ということがすぐにわかったらしい。即日中止になったとされている。</p> | 記念誌大谷川放水路 |
| | 道路と交通 | <p>明治36年の麻機新道が設けられる前は、すべて徒歩であったが、道路整備後すぐに、農車の全盛時代となり、運搬の重要手段となった。</p> <p>自転車は明治43年頃2、3台のみであったが、昭和9年の市合併時には登録1,600台を記録している。</p> <p>人力車は、明治大正時代幡谷医師が1台所有のみ。</p> <p>乗合馬車は、大正の末年頃1台あり、始めは北村から後には池ヶ谷から浅間前まで不定期に営業していた。</p> <p>大正5年頃自動車が見られるようになり、昭和7年山下自動車会社がバス運行の許可を得て、後に静岡電鉄となって今日に至っている。</p> <p>自家用車も徐々に増加したが、ある時期から急速に増加した。</p> | 麻機誌 |

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|------|----------|--|--|
| 歴史 | 地名 | 室町頃までは麻 ^{あさ} 服、浅 ^{あさ} 服、麻機、麻畑、浅畑等いろいろに呼ばれていたが、江戸期になってからは大体浅畑に統一して使用されていたようである。 明治22年正式に麻機村の呼称が固定した。 | 麻機誌 あさはた 創立百周年 記念誌 地元ヒアリング |
| | 伝説・民話・昔話 | 【麻機地区】 ①沼のばあさん、②むじな和尚、③きびたの五郎左衛門、④琴弾きの松、⑤きつね落しの毛皮、⑥池ヶ谷の天白、⑦女ヶ谷、⑧肥付石、⑨お泊まりさん、⑩鈴石天神、⑪力石、⑫おたつ火、⑬日本武尊伝説 【千代田地区】 ①十二艘川、②川合の水神様、③道白平、④けらはごの松、④姥神社、⑤先宮、⑥川合神明社 | 麻機誌 千代田誌 記念誌大谷 川放水路 |
| 史跡 | 文化財等 | ●文化財 県指定工芸 鰐口（浅間神社） 県指定天然記念物 トウツバキ（池ヶ谷） 埋蔵文化財 | 静岡市教育 委員会資料 |
| 社寺仏閣 | 寺院 | 【麻機地区】 ①池ヶ谷地区 桂林寺 ②有永地区 聖楽寺、聖楽寺和観音堂、桃隠寺、大音寺 ③北地区 瑞雲寺、喜相院（廃寺）、西光寺（廃寺）、智徳院 霊仙寺（廃寺）、光明寺（廃寺）、円光院 | 麻機誌 麻機村誌 千代田誌 |
| | 神社 | 【麻機地区】 ①池ヶ谷地区 天満宮（境内神 社荒神社） ②南口地区 神明宮（境内神社 春日神社、御嶽神社） ③南奥地区 八幡宮、天神社 ④有永地区 大御戸神社、稲荷神社、天神社、山神社 ⑤羽高地区 津島神社 ⑥北地区 浅間神社（境内神社 西宮神社、荒神社、神明宮、津島神社、市気嶋神社、今宮天神社、三峯神社） ⑦東地区 日賀美神社（境内神社 金刀比羅神社、稲荷神社、鈴石神社、火産霊神社） 【八千代地区】 ①南沼上地区 諏訪神社 神明宮（境内神社 金比羅神社） ②川合地区 神明社（境内神社 山神社、水神社） | 麻機誌 麻機村誌 千代田誌 |

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|---------|--|---|------------------------|
| 暮らし | 産業 | <p>明治初年まで雑木林の薪が主。その一部の「どくえ」の木が燈油原料。</p> <p>明治初年より茶が輸出されると雑木を開墾し、茶の栽培を始める。</p> <p>明治 34 年頃に、茶から柑橘栽培に転換し、昭和初期頃主産業となる。</p> <p>明治中期よりレンコン栽培が始まり、大正期には商品化される。昭和 10～15 年長蓮根からダルマ蓮根に切り替える。</p> | 麻機誌 地元ヒアリング |
| | 民俗 | その他、レンコン栽培、水田の状況による稲作、田下駄、稲作信仰の紹介 | |
| | 信仰 | 麻機は庚申講が盛んだったので、庚申塔が昭和 53 年 3 月現在 19 基確認されているが、保存状態は様々である。 | |
| | 年中行事 | <p>【麻機地区】</p> <p>初山、七草、田打ち、ドンドン焼き、マユ玉、二十日正月、初牛、節分、山の神さん、おひなさま、農あがり、盆、十五夜、お日待ち、イモウデ</p> <p>【千代田地区】</p> <p>麻機地区とほぼ同様であるが、山家（山間部）と田所（平地部）では伝承度やその内容に違いが見られる。</p> | 麻機誌 千代田誌 地元ヒアリング |
| 食生活 | <p>江戸末期における村の人々の食生活は次のようであった。</p> <p>1. 朝 味噌汁 1 杯（味噌各自自製）、温飯</p> <p>1. 昼 冷飯、香のもの（沢庵）おかずなし</p> <p>1. 麦飯、極めて軽いおかず（無き時は香由もの）</p> <p>家でご馳走の日（麻機・千代田地区ほぼ同じ）</p> <p>元日（雑煮）、小正月（雑煮）、寒あけ（豆まき）、三月三日 ひなの節句、彼岸 中日（ぼたもち あげだんご）、茶振舞（茶節句）植上げ（田植完了）、野上り日待ちの日、盆（池ヶ谷を除き八日一日）、土用入 アズキ（丑の日うなぎ多し）、秋彼岸 お月見（だんごぬすみ）、秋お日待ち 亥の子 ぼたもち</p> <p>年越しそば</p> <p>昭和 40 年頃</p> <p>生のハスの実、野草。9 月頃にはレンコンが美味しい。冬には、作業しながら焼きみかんを食べた。</p> <p>肉類は、特にキジ、ウズラは美味しい。イノシシやウサギも食べた。</p> | 麻機誌 千代田誌 地元ヒアリング | |
| 麻機沼の暮らし | <川の浚渫作業> | <p>部落民は夏になると土砂をさらい、道づくりを行った。</p> <p>ひと夏の雨で勾配の少ない川底は泥が数尺溜まるため、来年の田植前に部落民総出で川掘りを行った。女の方は土手の草を刈りや、土手に上げられた土をならす。男はスコップまたは四本歯の万能鍬で高い土手に泥土をすくいあげて、川の清掃をして雨期を迎えた。また、巴川は長尾川や吉田川の合流点まで出向いて行って掘った。モッコをさし合いで高い土手まで担ぎ上げる作業は随分と苦しい土方だった。男は十六歳になるとかやく課役の任を負わされた。</p> | 麻機誌 地元ヒアリング |

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|-----|---------|--|----------------|
| 暮らし | 麻機沼のくらし | <p><川周辺の昆虫・野鳥> 一時、トンボが激減したが、麻機遊水地により、数多くの種類が棲息している。 野鳥は徳川家康が駿府に隠居するとこの麻機沼へも狩猟にくるほど多くの野鳥が棲息する。</p> <p><川の生物と魚取り> かつて、川の水がきれいで、数多くの水生生物が棲息していた。また、冬魚が集まって動けなくなっているのを入口に竹のスタレをして逃げない様にしておいて、魚を取る「しまあげ」と言った方法が現在でも行われ、寒鮎（フナ）の味は天下一品である。</p> | 麻機誌 地元ヒアリング |
| | 麻機の生活 | <p><明治の児童の遊び> 男子 正月一たこあげ 春 一たこあげ・こま閑戯・めんこ・めじろとり・他 小鳥とり 夏 一魚つり・水泳・どじょうたたき 秋 一小鳥とり・メンコ・輪廻し 冬 一氷上のねつき・鳥とり・こま廻し 年間を通して縄とび</p> <p>女子 正月一まりつき・カルタ 春夏秋冬一おじゃみ（お手玉）・きしゃご・縄とび・人形遊び・風船遊び</p> <p><服装> 男の服装は、地主が羽織を着用したが、大方は半纏を着ていた。羽織は儀式用であった。明治10年頃から村長格の人は儀式用として山高帽を用いた。 女の服装もお祭り以外に、少しきれいにすれば「シャレモノ」として非難された。 この様相は第1次世界大戦末から昭和期にかけて少しずつ変化し、男の農衣は明治10年頃からセツボタンの紺シャツ、紺のもも引に変わり、現在のような農耕服に変わったのは昭和大戦時に軍服、国民服が流行してからである。 昭和20年前後、配給により、苧麻（ちょま）の上下の服があった。</p> <p><土地> 明治維新となり徳川慶喜・家達は駿府故にはいった旧幕臣もこれについて来たが居宅なく近郊の民家へ分宿した。 武士崩れで威張った態度がぬけず「お泊まりさん」という名称まで生れた。 明治9年から数年間現在の土地台帳の源になる土地の測量が行われ、土地の台帳ができ新しい地租の基礎を作ったが明治初年頃までは、麻機地区は松平丹後守の領地であった。</p> <p><水との戦い> 麻機水田面積は約250町（248ha）と言われている。このうち、百町歩余りは旧浅畑沼の地域で明治初年は所謂「いかり」と称して雨が降れば冠水した。 俗に言う十年一作が文字通りで稲の収穫は不安定であった。 浅畑沼の開拓は元禄以来の懸案で、明治なってからは住民の命をかけた仕事であった。</p> | |

| 項目 | 分類 | 概要 | 主な出典 |
|-----|-------|--|-------------------|
| 暮らし | 麻機の生活 | <p><下水問題></p> <p>昭和の始めまでは、肥料の主なものは人糞尿であったので市内に生ずる之を肥桶で担いで運んだ。尿尿の値段が非常に高く、大正年代米1俵（4斗）につき29銭であった。化学肥料の進歩で、市では尿尿問題が起り、下水問題が新たな問題として論じられる。</p> | 麻機誌 |
| | 教育 | <p><教育></p> <p>学校は徳川末期には幡谷塾（後の習道舎）があり、麻機学舎及読習舎などで志ある子弟を教えていた。その後安東麻機組合村を作り安東学校に合併し明治23年町村制となり麻機村の確立に伴い現在の位置に麻機尋常小学校を創立した。（明治23年3月28日）</p> | 麻機誌 あさはた創立百周年記 |
| 風景 | 景観 | <p>当地区の北側には文珠・竜爪山からの山並みが南に延びて、賤機丘陵、浅畑丘陵と南沼上の丘陵に分かれている。</p> <p>丘陵地の間は、農地によるのどかな田園風景が広がる。水辺景観は、巴川と浅畑川が緩やかに南北に地区を流れる。また、その他安東川、七曲川、十二双川が流れる。居住地が集積する北地区では、護岸が3面張りになっている。その他は、土手のある河川風景となっている。</p> <p>河川沿いからは、北地区を除いて、周辺に障害となる施設等が無いいため、賤機、浅畑丘陵地が見え、北側遠方には、竜爪山が見える。</p> <p>池ヶ谷のトウツバキ、柳田橋のエノキ、津島神社のカシ、岩崎宅前の大エノキ、森宅の茶樹などの巨木等が地区の緑のシンボルとなっている。北地区では沿道に桜並木が見られるほか、巴川河川沿いに独立樹が数本見られる。また、春近くには菜の花が巴川の一部区間の斜面一面に咲いている。</p> <p>庚申塔が集落内等に見られる。</p> <p>賤機山裾には住宅や社寺仏閣の建物が広がり、浅畑丘陵の南側には医療施設が集積し、南沼上の丘陵の東側には、静清卸売市場・流通センター、清掃工場等の大規模な建物が立地する。</p> <p>北、羽高地区には、公営住宅や低層の住宅等が集積する住宅団地の居住景観が広がる。</p> <p>東地区では曲がりくねった狭小な道路と低層の住宅による落ち着いた集落景観を形成し、一部住宅団地も丘陵地の麓に見られる。また、一部に狭小な道路沿いに、槇の生け垣が続く。</p> <p>有永、南、池ヶ谷、唐瀬地区の県道山脇大谷線（麻機街道）沿いには、集落の面影が多少残る住宅も見られるが、1宅地裏側には、最近の住宅メーカーの住宅が多く建ち並ぶ。</p> | 地元ヒアリング 現地踏査 |

4-2 麻機遊水地の地理的な理解

1) 地形・地質の資料整理

(1) 麻機沼の地形の歴史

今から6,000年前の縄文時代前期には、海面が現在より114~116m低い位置にあったが、海面が急速に上昇し、各地の海岸は後退し、現在より低かった沖積平野には、各地で入江や湾ができた。

静岡・清水平野の低地にも清水から麻機に至る奥深い入江を「古麻機入江」または「古麻機湾」と呼んでいる。その他大谷の入江、小坂の入江などがあった。

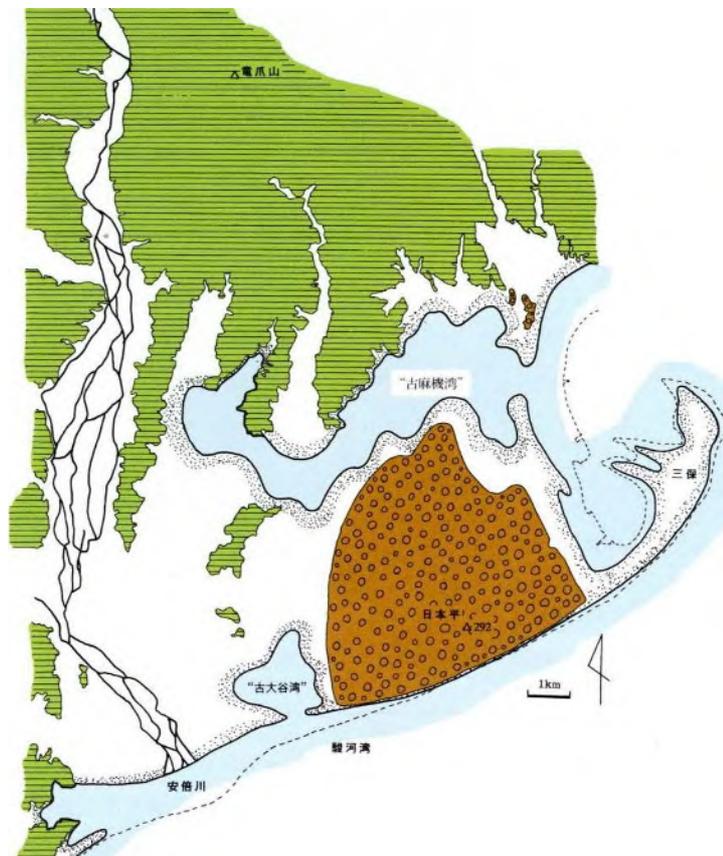
麻機沼の地下からは、当時入江に棲息していた貝の化石が出土している。

古麻機湾の南側に有度山が存在するが、古い地図では「有渡山」と記され、その名は「海門(うなど)」に由来するということから、「渡し」が行われたと推察される。

また、「古麻機湾」と「古大谷湾」とはつながっていたのではという考えもあるが、まだ、確かな地質的な証拠は得られていない。

6,000年以降、海面は若干の昇降を繰り返しながら、現在の海水準まで低下していった。

海面の緩やかな低下とともに、安倍川扇状地ができ、周辺の小河川から埋積作用が進み、「古麻機湾」と「古大谷湾」は消滅して、沖積低地となり、そこに巴川や大谷川が流れるようになった。

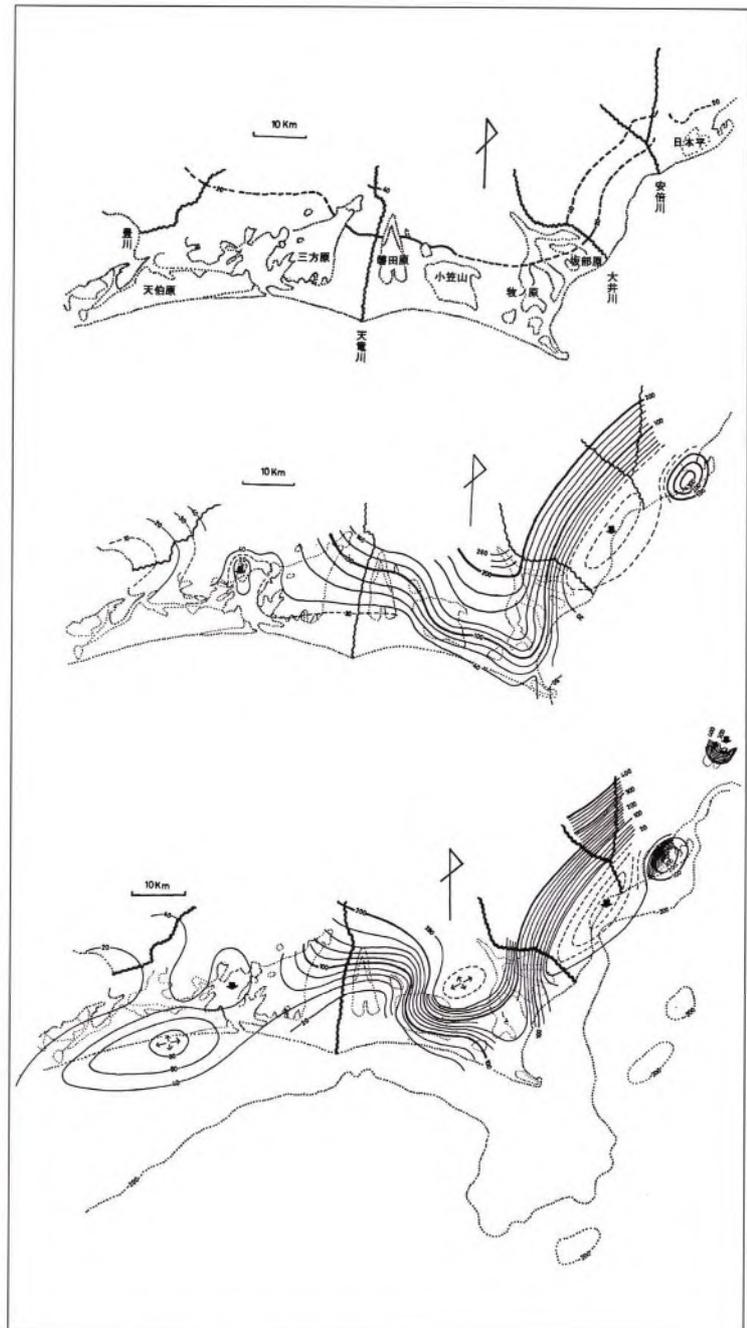


(資料：記念誌大谷川放水路)

有度山は12万年前の沖積平野が下図で示すように、南東から押されて地殻が波状にうねったように変形したため、ドーム状に隆起した。また、背後の山も隆起したことにより、静岡平野から大井川平野にかけて凹地状に沈降し、そこに安倍川と大井川が流れ込み、静岡平野と大井川下流平野を造った。

「古麻機入江」や麻機沼の形成についても、この地域の最近地質時代の地殻変動が強く影響していると推察されている。

■静岡地域の最新地質時代の地殻変動図（土 1968）



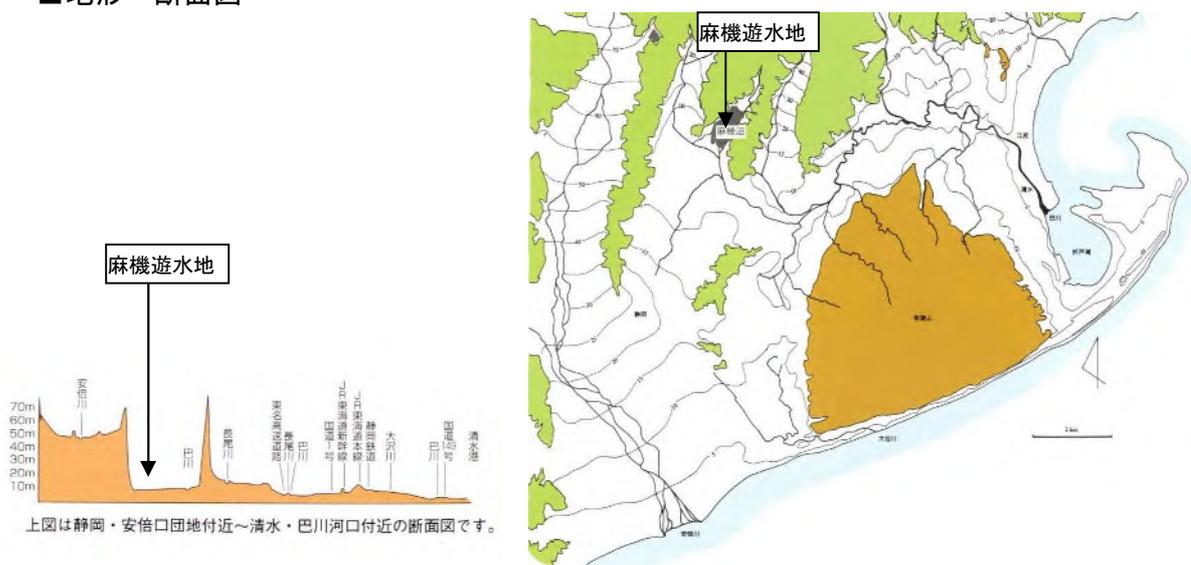
上：現在の海岸平野の等高線
 中：12万年前の海岸平野が変形した姿
 下：30～50万年前の海岸平野が変形した姿

(2) なぜ麻機沼ができたのか

下図に示すように静岡平野の等高線を見ると、賤機山南端を中心に扇状が広がっている。扇状地は河川がしばしば流路を変えて扇状に流れるため、安倍川は南に延びた賤機山のために平常は南に流れたが、時には東や北東にも流れ、運んできた砂礫を堆積させて、静岡平野を造ってきた。麻機低地のすぐ北側の山地は流域も狭く、土砂をあまり運ばなかったことにより、南端の標高 28m という高い扇状地の頂点から流れた表流水や扇状地末端から湧き出した伏流水が標高 6m という最も低い所に集まって麻機沼を造ったと推察される。

さらに、江戸時代になると徳川家康によって駿府城が築造され、薩摩土手が造られたために安倍川の水量が減少し、下流では長尾川や吉田川から流出した土砂が堆積し、流れが衰え麻機沼ができたと言われている。

■地形・断面図



図：記念誌大谷川放水路

(3) 麻機遊水池の誕生

戦国時代が終わり、世の中が安定してくると人口も増え、この地域でも水田が開かれてきたが、低地を流れる巴川は水はけが悪く、水田は10年1作と言われるほどで、大雨が降れば何日も水が引かず稲は腐ってしまった。このような状態を何とかしようと江戸時代から大規模な巴川の浚渫や流れを変える工事が行われてきた。

明治期の麻機沼は0.5k m²もある大きな沼だった。静岡の都市化が進み、地下水利用の増大により地下水位が低下し麻機沼は縮小していった。低地部や巴川の支流との合流点では土砂堆積のため、河床が上昇し、排水不良や低地の水害が幾度と無く繰り返していた。さらに市街化が進むと、特に低地部では大雨の場合に溢水と湛水による被害が予想されたため、明治39年から流路直線化による河川改修が始められた。

戦後、食糧増産を目指した土地改良事業によって良好な水田となった。昭和40年から50年頃には高度経済成長とともに巴川流域の市街化が進み、台風などの大雨によって浸水被害が発生するようになった。

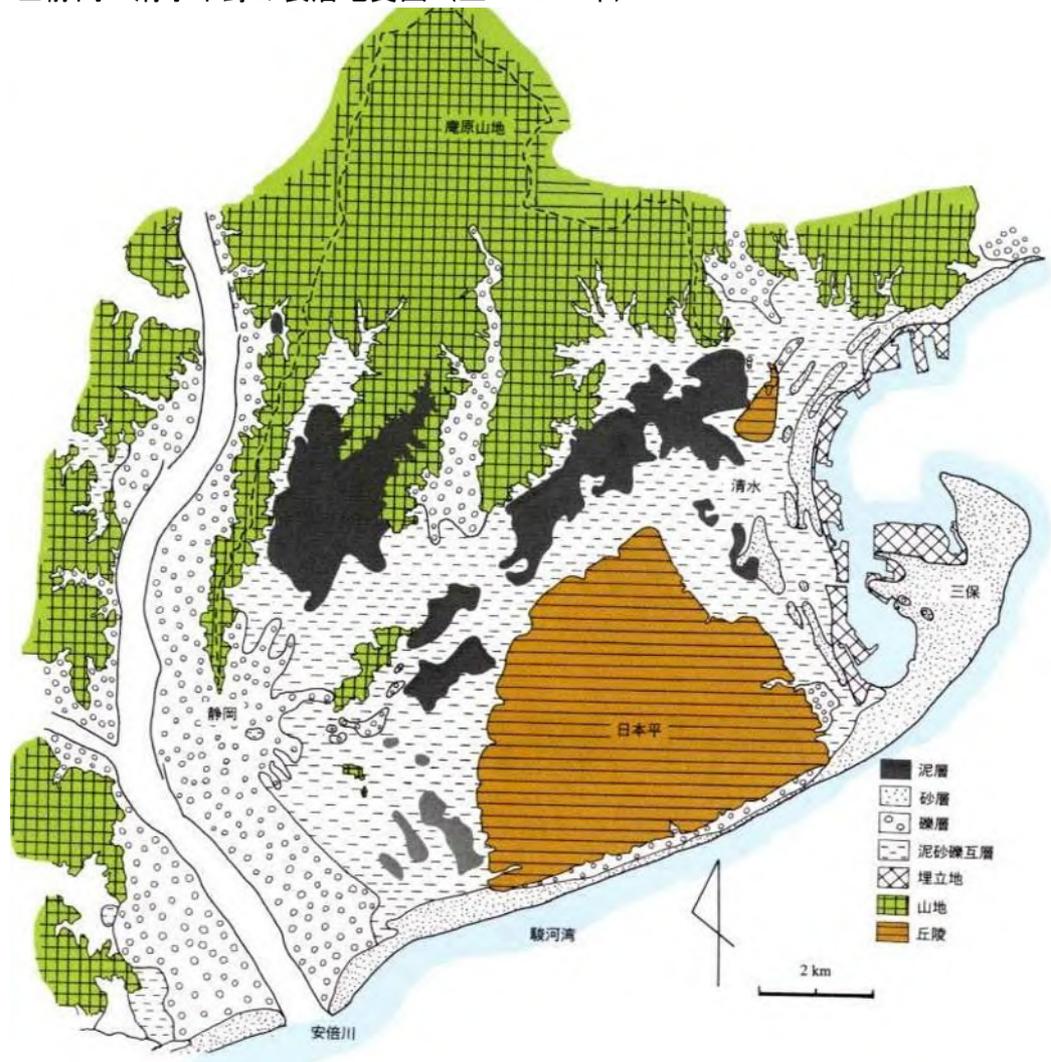
特に、昭和49年7月7日～8日の「七夕豪雨」による静岡・清水平野の大規模な水害を契機に巴川流域の総合治水対策事業への取り組み、大谷川放水路、麻機遊水地の整備が行われ、平成11年には大谷川放水路が完成し、麻機遊水地は5つの工区に分けて整備を進め、3・4工区を整備し、1・2・5工区の整備を順次進めている。

(4) 麻機遊水地周辺の地質

麻機地域の地質は、下図に示すとおり、泥層でその周辺は泥砂礫互層となっている。泥層は表層5mのうち泥質80%が占める地域で、安倍川扇状地の末端にある麻機沼や大谷の2地区のほか、山地の陰となる長沼、小鹿地区や麻機沼から清水平野へと通じる巴川流域に多く見られる。

泥砂礫互層は砂礫泥の互層の地盤で、泥質が半分以上を占め、泥質地盤との境目に見られる。

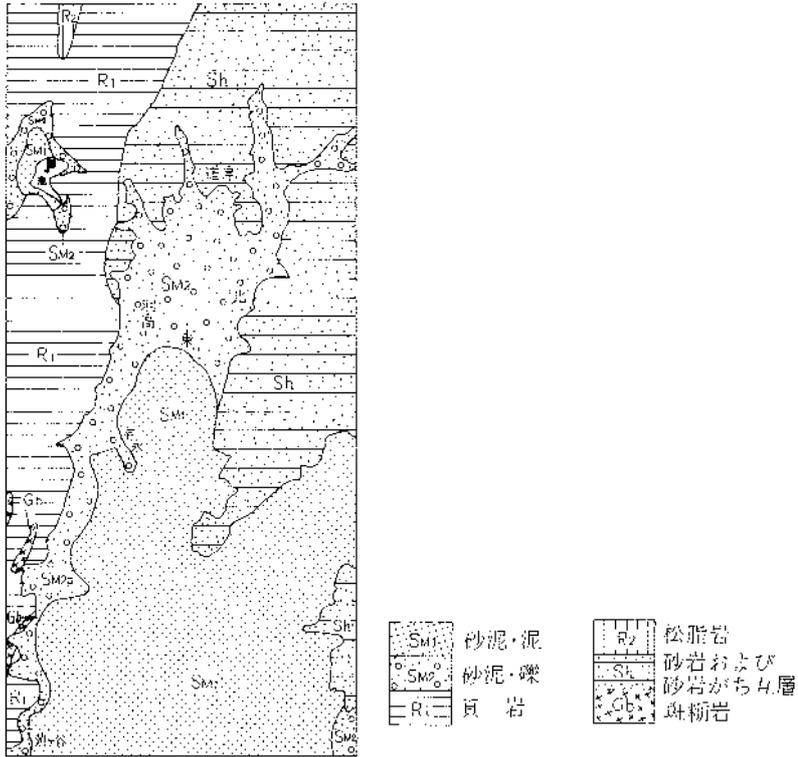
■ 静岡・清水平野の表層地質図 (土 1971年)



次に、等高線の間隔に基づく地形の標高差と土壤断面や地質柱状断面図により、広汎な麻機低湿沖積地域、巴川の扇状地（麻機地区）緩やかな扇状地域、麻機山東麓（崖錘）の3つの地域に大別される。

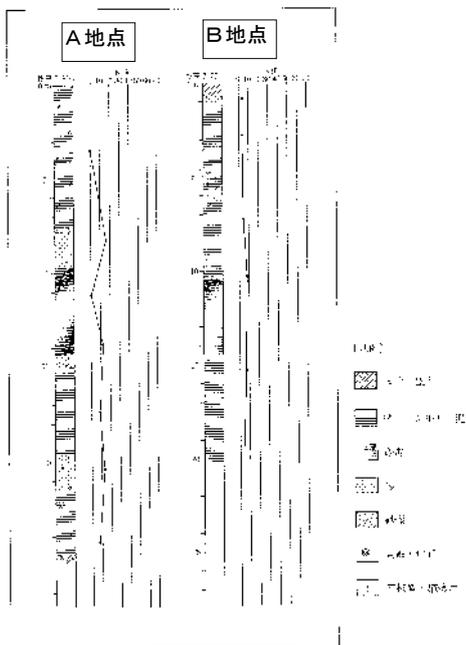
麻機低湿沖積地域は、古来常冠水地域として得意な地域的性格を呈していた。特に、巴川と七曲川に挟まれた三角状の低湿地は、その表層位の堆積土壌から、泥炭性の地域的な特徴が見られる。低湿沖積地には、標高7m以下、凹状の低湿地と、中小河川の旧河道、古小河川の旧河道、湖沼地の痕跡などがうかがえる。これら微凹地の表土は、砂礫、砂混じりに大部分は有機質シルト、粘土、泥混じりの土層から成り立っている。また、航空写真からは、芝原・羽高・南・時ヶ谷・各地区の一部に、地域的な色調の相違

■麻機周辺地質分布図



(資料：麻機誌)

■ 県営圃場地区内の地質柱状断面図



(資料 静岡・清水地域の地質 説明書 1967 静岡商工会議所抜粋)

(6) 土 壤

麻機地区の土壤構成上から見ると、多彩な土壤のメカニズムの特徴が地域的に顕示されている。南部地区と北部地区とは、相互に土壤型が相違している。土壤調査地点からは、砂礫の厚さ、その間隔差が見受けられる。下図に示す地質柱状断面図からは、堆積環境の時代変化に伴う、巴川の河道の安定化などが想定される。

賤機山東麓よりのA地点の柱状断面図からみると、地表から厚さ1m表土で、それ以下、礫まじりの砂層と、有機質粘土、シルト、泥混じり含有層が厚さ約7mにかけて構成されている。その層位間には、厚さ2、3mほどの薄い砂礫層が同じ間隔で挟まれている。

このことから、洪水期、賤機山地の山滑り崖錘からの土石流、砂礫の押し出しによる土砂の堆積の痕跡と推定される。

また、N値の差異から、地盤軟弱の度合いをみると、当地点は、砂礫層部分で、15内外の数値、その下降層位は、平均10の数値を示している。N値のピーク波は12m内外の層位間に、上下の変動が見受けられる。このことから、地盤運動かあるいは、土壤堆積期の地形変動の繰り返しが推定される。

A地点、B地点のいずれも2つの層位間である有機質シルト、粘土、泥混じり含有層と、砂と泥含有層から成っている。その位相間隔は、B地点はA地点より長く、厚さ5~7m層位間に、植物片の含有層が集中的に看取される。このことから、ある時期の湖・沼地化の地形面を如実に反映しているものと言える。

巴川の氾濫や、低湿地の冠湛水に伴う土砂、砂礫などの堆積によって、河道が移動しにくくなった。低湿沖積地の南半部は、長期にわたり広汎な後背湿地として残された。特に、灰色の埴土、斑鉄や泥炭を含み、紫灰色の埴土など各層から成り、いわゆる厚い軟弱表層(N値1、2の数値)が形成されたとも言える。

さらに、第4紀末、海面変化との関連づけも一想定であるが、麻機低湿沖積地内における地盤構造の解析には、土壤断面図やその分類資料などを吟味検討し、全体像の特徴づけの浮き彫りによってその位置づけを捉えるべきである。

下表から判断すると、厚さ10m以上に及ぶ軟弱な泥層が卓越し、その形成は河水の排水不良、それに伴う冠・湛水の長時間、地下水位の上昇などによるものと言える。また、土層中に、多量の腐植物や貝殻化石が含有するのは、背湿地性の堆積物と看取される。

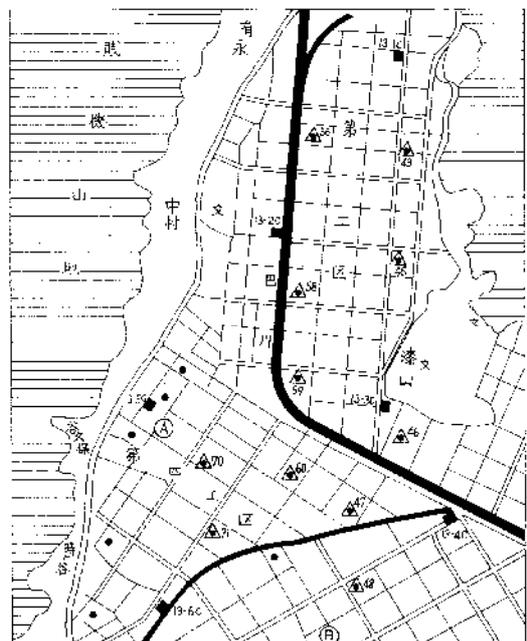
ほかに、低湿沖積層の一部に、厚さ100m内外層位間に、礫土や円礫、砂土が連続の含有は、まさに、三角州性の堆積物と看取される。したがって賤機山東麓寄り、麻機低湿沖積地では、土壤構成からと、その質的メカニズムに地域差が見いだされる。

すなわち、低湿地域内では、ラグーン性の堆積物と、三角州状の堆積物とに大別される。したがって、麻機低湿地沖積地は、泥質性堆積から三角州性の低湿堆積へを変遷された縮図の一端と推定される。

■ 県営第1、4工区における圃場区画と土壤調査地点の分布図

(資料：麻機誌)

- | | | | |
|---|----------|---|--------|
| △ | 土壤調査地点 | 文 | 学 校 |
| ● | 地質柱状断面地点 | ■ | 灌漑排水設備 |
| △ | 山 地 | — | 河 道 |



■麻機低地（第1工区）及び（第4工区）の土壤調査地点の概要表

| 調査地点番号 | 断面形状 | | | | 土色 | 腐植・グライ層 | 耕作 |
|--------|------|---------|------|----|------------|---------|----|
| | 深さ | 厚さ(cm) | 土質 | 層 | | | |
| 43 | 1 | 0-18 | L | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 18-45 | L | V | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 45-68 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 68-100 | Co.S | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 45 | 1 | 0-17 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 17-35 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 35-60 | C | AW | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 60-80 | F | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 46 | 1 | 0-15 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 15-35 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 35-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 100-150 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 50 | 1 | 0-12 | L | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 12-17 | L | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 17-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 56 | 1 | 0-15 | L | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 15-47 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 47-50 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 50-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 59 | 1 | 0-15 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 15-100 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |

| 調査地点番号 | 断面形状 | | | | 土色 | 腐植・グライ層 | 耕作 |
|--------|------|--------|-----|----|------------|---------|----|
| | 深さ | 厚さ(cm) | 土質 | 層 | | | |
| 67 | 1 | 0-17 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 17-34 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 34-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 48 | 1 | 0-17 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 17-59 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 59-65 | F | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 65-100 | F.S | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 90 | 1 | 0-15 | C | AW | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 15-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 70 | 1 | 0-17 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 17-21 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 21-30 | C | AW | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 30-75 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 5 | 75-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 71 | 1 | 0-13 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 13-25 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 25-40 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 40-100 | F.S | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |

■麻機低地（南土地改良区）の土壤調査地点概要表

(注) 土柱 S 砂土 S.L 砂層土 L 壤土 C.L 粘壤土 C 粘土
 Co.S 砂土 S.L 砂層土 L 壤土 C.L 粘壤土 C 粘土
 ●腐植 V 有り(2%以下) ●泥炭 〇含む
 M 含む(2~4%) 〇〇 腐植層
 AW 腐植(5~8%)
 AW 腐植(10~20%) ●腐植 〇〇
 ●腐植 〇 有り(2%以下)
 〇 含む(2%~4%)
 〇〇 腐植(4%~9%)
 〇〇〇 腐植(10%~19%)
 ●腐植 〇〇〇 腐植(20%以上)
 V 有り X 含む 〇 腐植 〇〇 腐植
 ●グライ層 ● 腐植 ● 腐植
 ●水 乾田 半半乾田 湿一灌田
 ●土地利用 ① 一毛作 ② 二毛作

| 調査地点番号 | 断面形状 | | | | 土色 | 腐植・グライ層 | 耕作 |
|--------|------|--------|------|---|------------|---------|----|
| | 深さ | 厚さ(cm) | 土質 | 層 | | | |
| 72 | 1 | 0-14 | L | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 14-19 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 80 | 1 | 0-15 | L | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 15-35 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 35-65 | Co.S | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 4 | 65-100 | C | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| 8 | 1 | 0-15 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | 中 |
| | 2 | 15-35 | C | N | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |
| | 3 | 35-100 | Co.S | | 暗灰色腐植を含む粘土 | 中 | |

(注) 昭和30年度「土地改良事業計画」の後の土壤調査報告(資料参照)より一部抜粋

■第1・第4両工区内の土壤型

| 土壌型 | 深さ(深さ) | 断面形状 | 取集(深さ) | 要土地改良 |
|-----|--------|--------|---------------------|-----------------------|
| 1 | 1 | 0-12 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.4-2.6 17 排水不良 |
| | 2 | 12-17 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 17-100 | 粘土・地下水位高(20cm) | |
| 2 | 1 | 0-14 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.5-2.7 12 排水不良 |
| | 2 | 14-45 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 45-100 | 粘土・地下水位高(35cm) | |
| 4 | 1 | 0-16 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.5-2.7 25 排水不良 |
| | 2 | 16-47 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 47-60 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 60-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| 5 | 1 | 0-14 | 黄灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.3-2.5 52 排水不良 |
| | 2 | 14-38 | 黄灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 38-60 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 60-100 | 黄灰色の粘土・地下水位(20cm) | |
| S | 1 | 0-13 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.4-2.6 62 排水不良(一部冠水) |
| | 2 | 13-22 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 22-45 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 45-100 | 黄灰色の粘土・地下水位(60cm) | |
| R | 1 | 0-17 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.3-2.3 56 一部冠水(排水) |
| | 2 | 17-45 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 45-80 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 80-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |

| 土壌型 | 深さ(深さ) | 断面形状 | 取集(深さ) | 要土地改良 |
|-----|--------|--------|---------------------|-----------------|
| 9 | 1 | 0-12 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.2-2.3 57 排水不良 |
| | 2 | 12-34 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 34-66 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 66-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| 10 | 1 | 0-12 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.2-2.3 25 排水不良 |
| | 2 | 12-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| 15 | 1 | 0-18 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.3-2.6 12 排水不良 |
| | 2 | 18-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| 11 | 1 | 0-12 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.2-2.6 10 排水不良 |
| | 2 | 12-30 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 30-75 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 75-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| 12 | 1 | 0-17 | 暗灰色の腐植を含む粘土・腐植層に腐植層 | 2.1-2.5 54 排水不良 |
| | 2 | 17-30 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 3 | 30-50 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |
| | 4 | 50-100 | 黄灰色の粘土・腐植層に腐植層 | |

(注) 昭和30年度「土地改良事業計画」の後の土壤調査報告(資料参照)より一部抜粋(静岡北部土地改良区提供資料)

(資料：麻機誌)

2) 最近の調査から言えること

巴川流域麻機遊水地第4工区の調査用ボーリングコアから得られた貝化石及び泥炭の¹⁴C年代について

静岡大学名誉教授地球科学 土 隆一

麻機遊水地第4工区の東縁近く、七曲川北側の調査用ボーリングG-7のコア〈長さ全長17m〉のシルト層中から、珍しく合弁の二枚貝化石 *Anadara granosa* ハイガイ1個体と巻貝化石 *Cerithidea djadjariensis* カワアイ2個体を採取することができた(図1, 2, 3)。そこで、ハイガイと泥炭層の¹⁴C年代測定を地球科学研究所(名古屋)に依頼して結果が得られたので、それに関して明らかになったことを以下に述べる。

(1) ハイガイの¹⁴C年代とその古環境:

合弁のハイガイ1個体は地表からの深さ14.6mのシルト層中から、またすぐそばでカワアイ1個体を得られた(写真1, 2)。ハイガイの年代は $6720 \pm 60^{14}\text{Cy. B. P}$ (B. Pは1950年以前)、なお、カワアイのもう1個体が近くの深さ14.5mのシルト層中からも得られた。

ハイガイは中部日本以南の内湾奥泥底干潟に生息しているもので、カワアイは本州以南の内湾の河口近くの砂泥底に生息している。得られたハイガイが合弁であることや、カワアイがコアの砂泥層から容易に見出されたことを考えると、これらは運ばれてきたものというよりは、本来その付近に生息していた自生的な環境を示すと考えることができる。

ハイガイの $6720 \pm 60^{14}\text{Cy. B. P}$ という年代から見ても、当時は縄文時代の前期にあたり、現在より温暖で数mほど高海面だった時期とされ、当時は清水港付近からこの辺りまで入江が伸びていた“古麻機湾”形成の時期で、この付近は当時の入江の奥に位置し、これらの貝が生息するような環境にあったことを裏付けるものと思っている(図4)。

(2) 泥炭層の年代とそれから推定される堆積速度:

上記ハイガイの年代に関連して、泥層よりはるかにゆっくりと堆積すると思われる泥炭層の堆積速度を調べて見た。泥炭層の最下部近くの地表下6.3-6.4mの泥炭の年代としては $4480 \pm 70^{14}\text{Cy. B. P}$ が得られた。これより上位は殆どが泥炭層から成るので、この年代あたりから古麻機湾の奥では泥炭が堆積する環境になったと思われる。

なお、ハイガイ産出層準の深さ14.6mから泥炭層最下部近くの深さ6.4mまでの厚さ8.2mは、多少の泥炭が混じるものの、大部分は泥層または砂層なので、その平均堆積速度を計算して見ると、およそ1mにつき273年となる。また、泥炭層の深さ6.4mから現在に近い深さを0.9mとし、その厚さ5.5mについて堆積速度を概算してみると、およそ1mにつき800年ということになった。

(3) まとめ

以上述べてきたように、麻機遊水地第4工区東縁近くの調査用ボーリングコアG7の深さ14.6mのシルト層中から合弁の二枚貝ハイガイが1個体得られ、その年代は縄文時代前期にあたる $6720 \pm 60^{14}\text{Cy. B. P}$ であることがわかった、近くのシルト層中から巻貝化石カワアイ2個体も容易に得ることができた。これらは縄文時代前期の高海面期に当時の清水港から延びていた古麻機湾の奥の海岸砂泥底に生息していたと思われる。これら貝化石が得られたことによって、清水港から当時“古麻機湾”が8km以上も西へ延びていたことや、その奥の海岸にはハイガイやカワアイが生息するような砂泥底がひろがっていた情景であることが明らかとなった。なお、この砂泥層の堆積速度は1mにつきおよそ273年、その上位の泥炭層5.5mは1mにつきおよそ800年という堆積速度が得られた。

図1 麻機遊水地第4工区の平面と貝化石が得られたボーリング位置
(国土地理院 25,000 分の1 地形図「静岡・清水」による)



図2 麻機遊水地第4工区の平面と貝化石が得られたボーリング位置

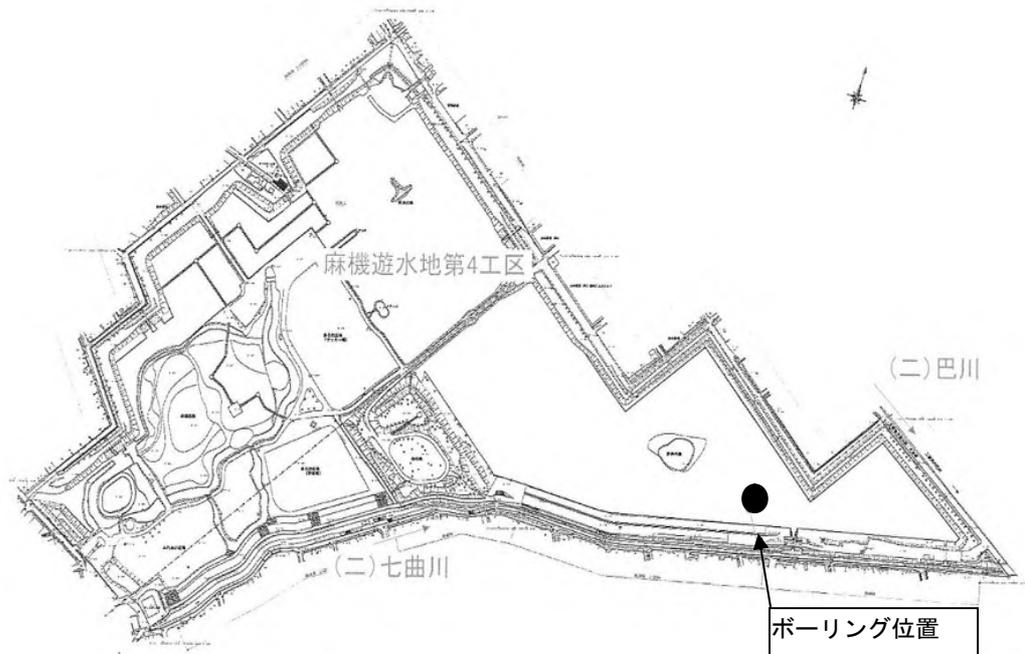


図3 ボーリングG-7の地質柱状図および貝化石の産出層準と¹⁴C年代

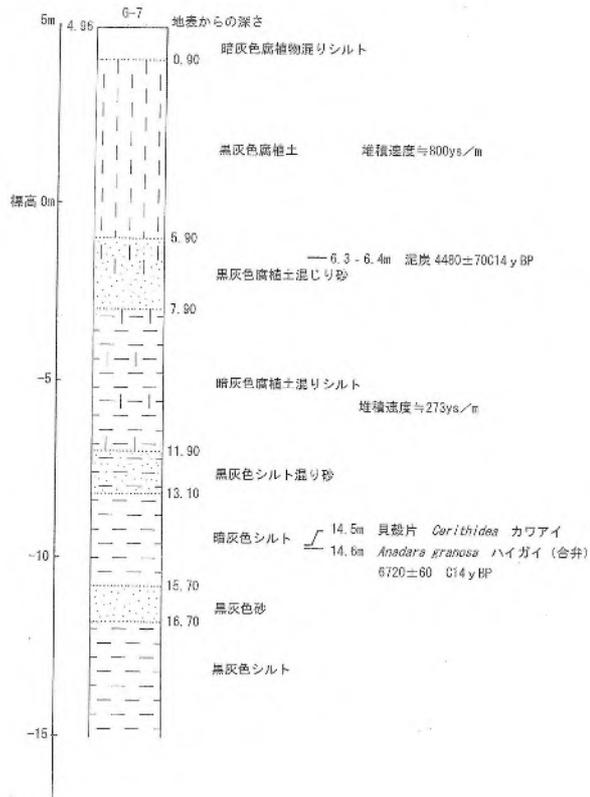


図4 縄文時代以前（約6,000年前）の静岡・清水平野と古麻機湾・古大谷湾と麻機遊水地の貝化石産出地点

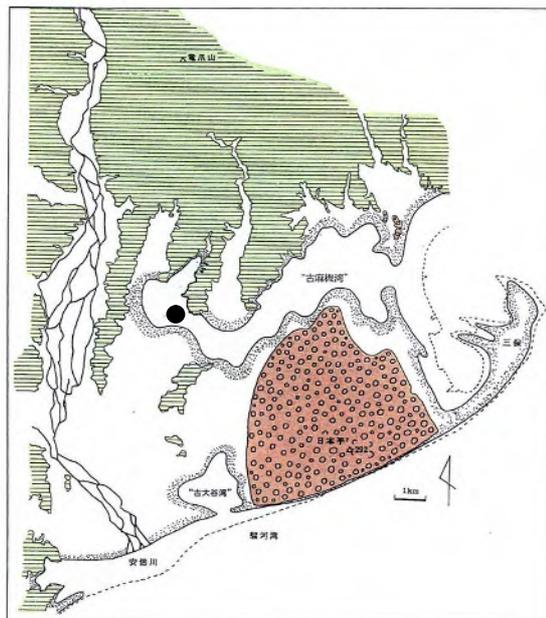


図4 縄文時代前期（約6000年前）の静岡・清水平野と古麻機湾・古大谷湾と麻機遊水地の貝化石産出地点 (●)

写真 1

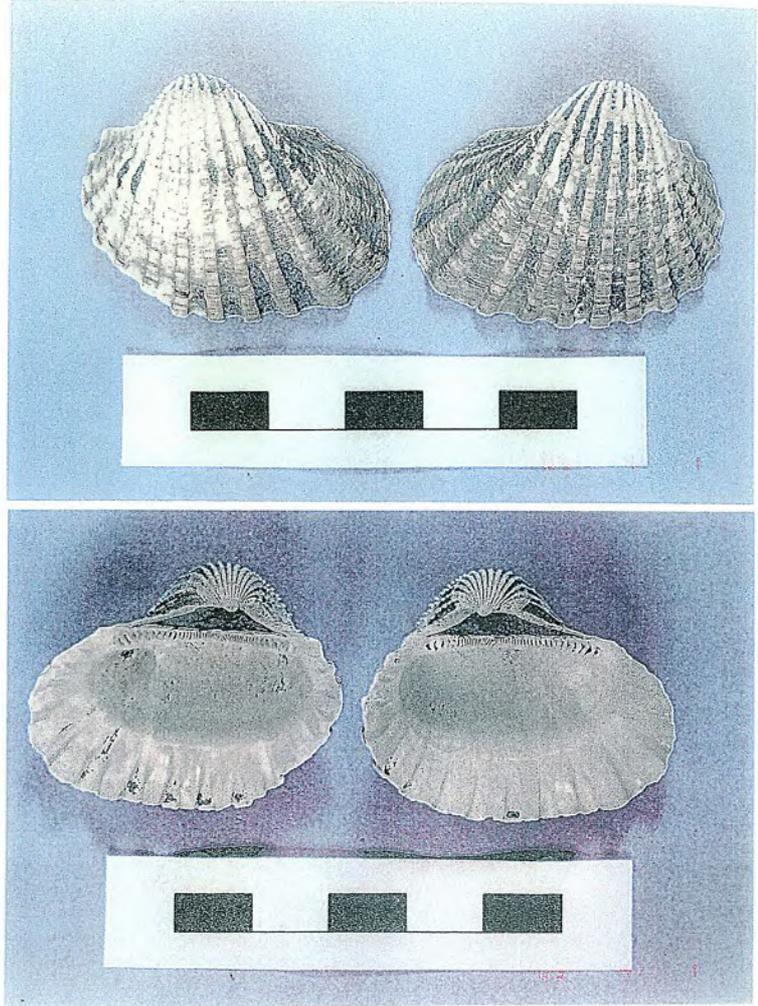


写真 1. *Anadara granosa bisenensis* Schenck et Reinhart ハイガイ
巴川遊水地第 4 工区 G-7、標高 4.96m、深さ 14.6m のシルト中に合弁で産出、
年代は、6720±60y.B.P. (スケールは黒白各 1cm)

写真 2

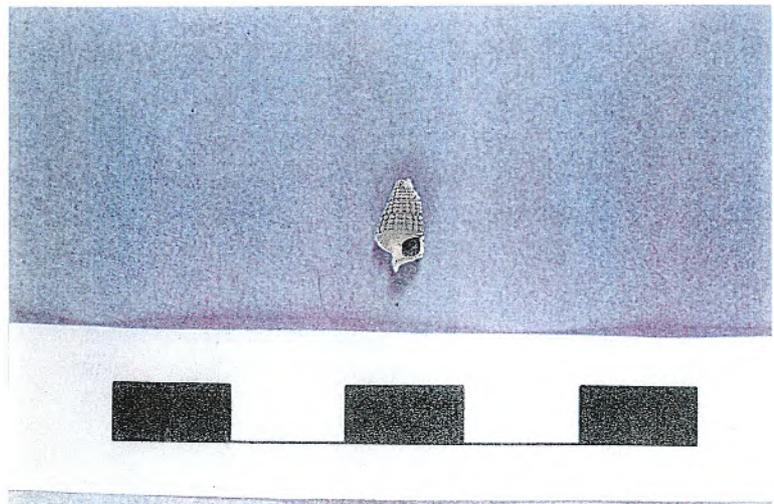


写真 2. *Cerithidea djadjariensis* (K. Martin) カワアイ
巴川遊水地第 4 工区 G-7、標高 4.96m、深さ 14.6m のシルト中にハイガイと共に点在

4-3 麻機遊水地周辺と人の関わり

1) 居住環境の資料整理

(1) 地勢

① 麻機地区

麻機地区は、静岡市市街地の北方、約8kmにあり、北に標高1,104mの文珠岳を控え、その南縁の山々に囲まれ、西は、岬半島状の賤機山地が突出し、安倍川筋と境を接し、特に、南は広汎な沖積地が展開している。また、かつて低湿沖積地には、浅畑沼を始め、小沼、武平淵など沼や低湿地が散在していた。

近郊農村として、静岡市街地からはむしろ偏在的位置にあったが、最近、巴川改修、耕地の区画整理の完成に伴う道路整備による市街地までの時間短縮化や一般住宅地や団地造成によることから、静岡市北部のベットタウンとしての地域的性格を形成してきている。

当村の土地開発の変遷は、巴川の氾濫や冠水、湛水による内水災害など、まさに村人の生活、営農あるいは集落など独特な人文景観の様相に大きな影響を与えてきている。

(資料：麻機誌)

② 千代田地区

千代田地区は静岡市街地の東北部を占め、麻機地区と隣接している。その大部分は平野で、一部は山地・河谷である。平野部は安倍川扇状地の後背湿地で、浅畑沼に発して清水港に注ぐ巴川の本支流が葉脈状をなしている。地区の南部を北街道が東西に走っている。これに沿って西から都市化が急速に進み、市街地を形成している。

北部は郊外を隔て山に繋がっている。そして長尾川が東の境界をなしている。長尾川の中流部河谷に沿って、山懐深くまで集落が点在している。

区域の頂点ともいべき竜爪山は郷土の北を囲め、寒気を遮って温暖な気候をもたらしている。八合目に穂積神社が鎮座する竜爪山は郷土の鎮守的な山である。

注) 竜爪の名義について「時雨峰」からきているといわれる。実際、竜南の人々が雨乞いの山あるいは農耕の山として信仰を寄せてきた。薬師岳と文珠岳を総称して流爪山という。

千代田の基盤は農耕社会であり、地域は山村と平地村との二つに分けられる。

そこには山の暮らしと野の暮らしがある。土地の人々はたがいに「山家」^{やまが}、「田所」^{たどころ}とよび合ってきた。生活様式は風土の特性と有機的に結びついた、きわめて生態系的なものである。

山家と田所それぞれの社会における生活様式の特徴と民俗生活の展開を次に概観してみる。(なお、「山村」の語は普通名詞として用い、「山家」は当地域を指す語として用いることにする。「平地村」と「田所」も同様である。)

北沼上・南沼上の両地区が山村(山家)の範疇に属する。竜爪山塊から長尾川本流・則沢川の二つの溪流が発し、平山集落の下で合流、河谷を南流して平地に臨んでいる。川の延長はきわめて短距離ながら、東海地方特有の川の相貌を呈している。

河谷は北に向かって鋭い切れ込みをみせ、長尾川の西岸に山脈に接して北沼上・南沼上の集落が点在している。千代田地区最奥の集落である則沢は、北西に切れ込んだ支谷にある。則沢川に臨む山麓の緩斜面に三つの集落が点在し、川を挟んでそびえる山岳斜面の田んぼを営んでいる。

一方、千代田地区の大部分は平地村(田所)で、田所の呼称が示すように田園地帯である。当地域一帯は安倍川の後背湿地で、川や沼が多く湿潤である。浅畑沼に発し支流を集めて流れくぐる巴川は出水の度に長尾川の水が逆流するなどのため流域開発が遅れた。

「新田」のつく地は江戸時代の開発になったものである。長年の竣深の結果、かつての湿地も大部分乾田となり、人々は安んじて生活できるようになった。

(資料：千代田誌)

(2) 麻機の歴史

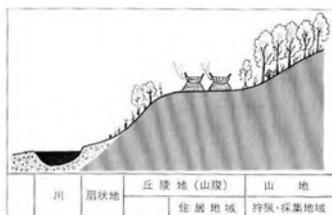
麻機地区の居住関連の主な歴史的概要を次に示す。

① 弥生時代

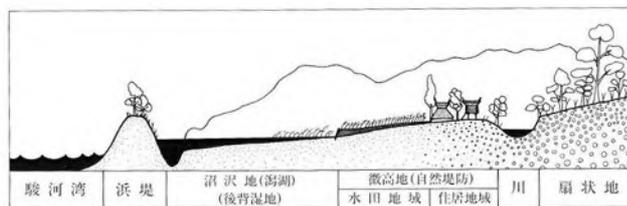
この時代、麻機地区への居住は、不明であるが、次のような調査結果も見られる。

従来、縄文時代の生活は有度丘陵と庵原丘陵を主舞台とした狩猟・漁労・採取活動が想定されていた。低地が舞台となるのは弥生時代になってからで、低地における水田稲作を経済基盤とし、古墳時代に入ると水田地帯を取り込む古墳を造営してきたと考えられてきた。

しかし、発掘調査など新資料とそれに伴う既存資料の再検討によって、縄文時代には、野山だけでなく、海や川での生業活動もかなり活発であったことや低地における人々の活動状況を想定できるようになってきている。また、弥生時代の後期後半代ではふたたび丘陵地へ居住を移した遺跡も見られている。



弥生時代の丘陵地居住



弥生時代の低地居住

(資料：静岡・清水平野の弥生時代 1988 静岡市立登呂博物館)

② 古墳時代

当地区の南、有永、池ヶ谷地区に古墳があり、太刀、土器などが出土している。

また、麻機地区周辺にも多くの古墳が分布しており、浅間神社の丘陵地にある賤機山古墳の他、谷津山の柚木山神古墳、小鹿堀之内、向敷地古墳などがある。

このことから、この時代には麻機地区に定住していたと思われる。

また、有永地区の「皇の池」の地名から日本武尊伝説がある。

③ 鎌倉時代

この時代の銅鏡や骨壺などが出土している。

④ 室町時代

北地区に、静岡県指定文化財となっている浅間神社の鰐口（天文3年）がある。

⑤ 今川統治時代

産業の開発や保護に力を入れるとともに、領民を大切に扱っていた。

⑥ 武田統治時代（1568～1582年）

武田家の家臣の流れをくむ家が数多く存在する。（ヒアリングより）

⑦ 徳川時代（1603～1656年）

家康の隠居時代、江戸の人口15万人、駿府の人口10万人が居住していた。家康は、鷹狩りに麻機地区を訪れている。

⑧小島藩時代

明暦2年（1656年）に小嶋領となり、藩主は禄高1万石の大名松平氏であったため、領民も重税に苦しめられ、百姓一揆もおこった。

⑨明治時代（1868～1912年）

明治7年習道舎と読習舎から麻機小学校設立する。

明治22年市町村制施行により、池ヶ谷、南、有永、羽高、北、東、浅畑新田の7ヶ村が安部郡麻機村となった。

明治34年麻機街道が安東村を挟み静岡市と通じることにより、麻機地区の近代化が始まったと言ってもよい。

（3）市街地の変遷

①市域の変遷と麻機、千代田村の編入

旧静岡市は、明治22年4月1日に市制を施行し、周辺の村を編入しながら、市域を拡大し、平成15年4月には、旧清水市との合併が行われ現在の静岡市となった。

そのような変遷の中で、当地区の関わる麻機村、千代田村は、昭和9年に旧静岡市に編入した。

■編入年月日

| 編入年月日 | (旧) 静岡市 |
|-------------|---|
| 明治22年 4月 1日 | 市制施行 |
| 41年10月 2日 | 安倍郡豊田村、南安東の一部を編入 |
| 42年 7月 1日 | 安倍郡南賤機村の一部を編入 |
| 昭和 3年10月 1日 | 安倍郡豊田村の全部を編入 |
| 4年 3月 1日 | 安倍郡安東村、大里村の全部を編入 |
| 7年 4月 1日 | 安倍郡賤機村の全部を編入 |
| 9年10月 1日 | 安倍郡千代田村、麻機村、大谷村、久能村、長田村の全部を編入 |
| 23年 4月10日 | 庵原郡西奈村の全部を編入 |
| 30年 6月 1日 | 安倍郡美和村、服織村、中藁科村、南藁科村の全部を編入 |
| 33年 4月 1日 | 清水市大字中吉田、大字平沢の全区域並びに大字谷田、大字中之郷の一部を編入 |
| 44年 1月 1日 | 安倍郡大河内村、梅ヶ島村、玉川村、井川村、清沢村、大川村の全部を編入 |
| 5年 1月 1日 | 清水市大字中之郷、大字谷田の一部を編入、静岡市大字中吉田、大字谷田の一部を清水市へ編入 |
| 9年 7月 1日 | 国土地理院に基づく変更 |
| 13年 2月 1日 | 国土地理院に基づく変更 |
| 15年 4月 1日 | 新「静岡市」誕生（旧静岡市と旧清水市との合併） |

（資料：静岡市総務課）

■編入後の人口と面積の推移

| 編入年 | 編入及び変更地域 | 編入後の人口(人) | 編入後の面積(k㎡) |
|-------|------------------------------------|-----------|------------|
| 明治22年 | 市政政行 | 37,681 | 4.36 |
| 明治41年 | 安部郡豊田村、南安東の一部を編入 | 51,111 | 5.03 |
| 明治42年 | 安部郡南賤機村の一部を編入 | 54,404 | 6.14 |
| 昭和 3年 | 安部郡豊田村の全部を編入 | 102,773 | 20.87 |
| 昭和 4年 | 安部郡安東村、大里村の全部を編入 | 129,039 | 37.94 |
| 昭和 7年 | 安部郡賤機村の全部を編入 | 149,470 | 73.34 |
| 昭和 9年 | 安部郡千代田村、麻機村、大谷村、久能村、長田村の全部を編入 | 191,005 | 14.88 |
| 昭和23年 | 庵原郡西奈村の全部を編入 | 220,284 | 159.96 |
| 昭和30年 | 安部郡美和村、服織村、中藁科村、南藁科村の全部を編入 | 293,749 | 293.89 |
| 昭和44年 | 安部郡大河内村、梅ヶ島村、玉川村、井川村、清沢村、大川村の全部を編入 | 410,294 | 1,146.19 |
| 平成15年 | 旧静岡市と旧清水市の合併 | 703,194 | 1,373.89 |

（資料：静岡市総務課）

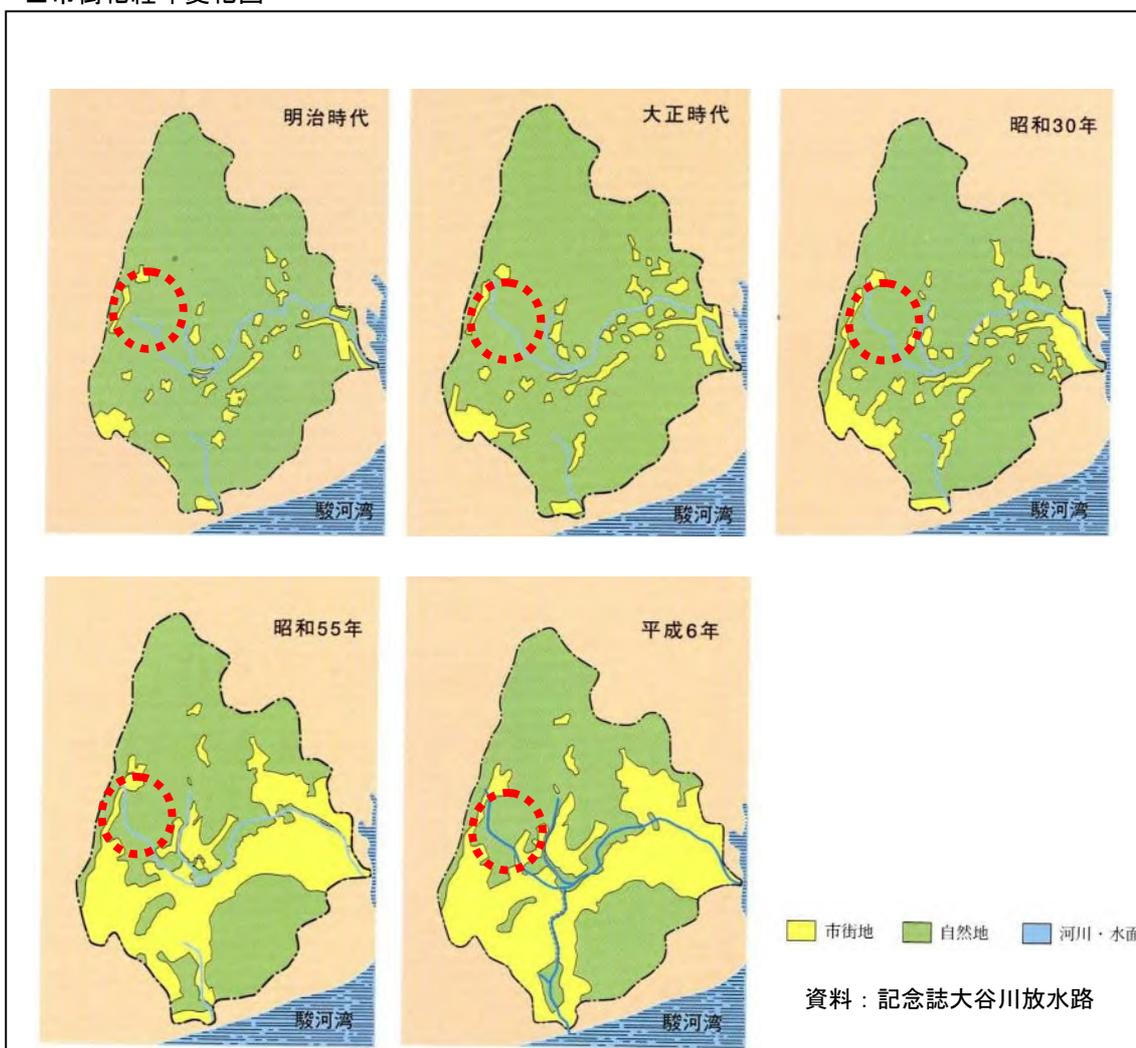
③市街化の変遷

旧静岡市では明治22年に市制施行後、何回か周辺の村を編入しながら、市域面積と人口が拡大していった。

巴川流域では、昭和30年以降急激に市街地の開発が進み、昭和30年には21%にすぎなかった市街地が昭和45年には33%、昭和55年には39%、平成6年には50%までにも達している。これらの開発は、山間部ではなく、低地部の開発がほとんどである。

麻機地区も下図で示すとおり、明治・大正期には麻機地区周辺には集落の分布がみられていたが、昭和55年には既成市街地と連坦し、平成6年には既成市街地の北側外縁部にも市街化が進行していることがわかる。

■市街化経年変化図



④人口集中地区（D I D地区）の推移

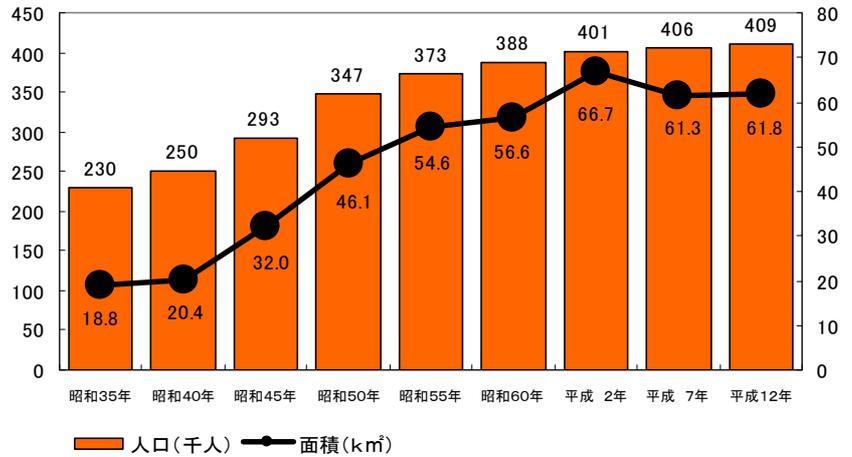
人口集中地区（以下D I Dという）の推移を見ると、D I D内の人口は昭和35年から増加し続けるが、平成2年から停滞傾向が見られる。

また、面積は平成12年をピークに減少している。

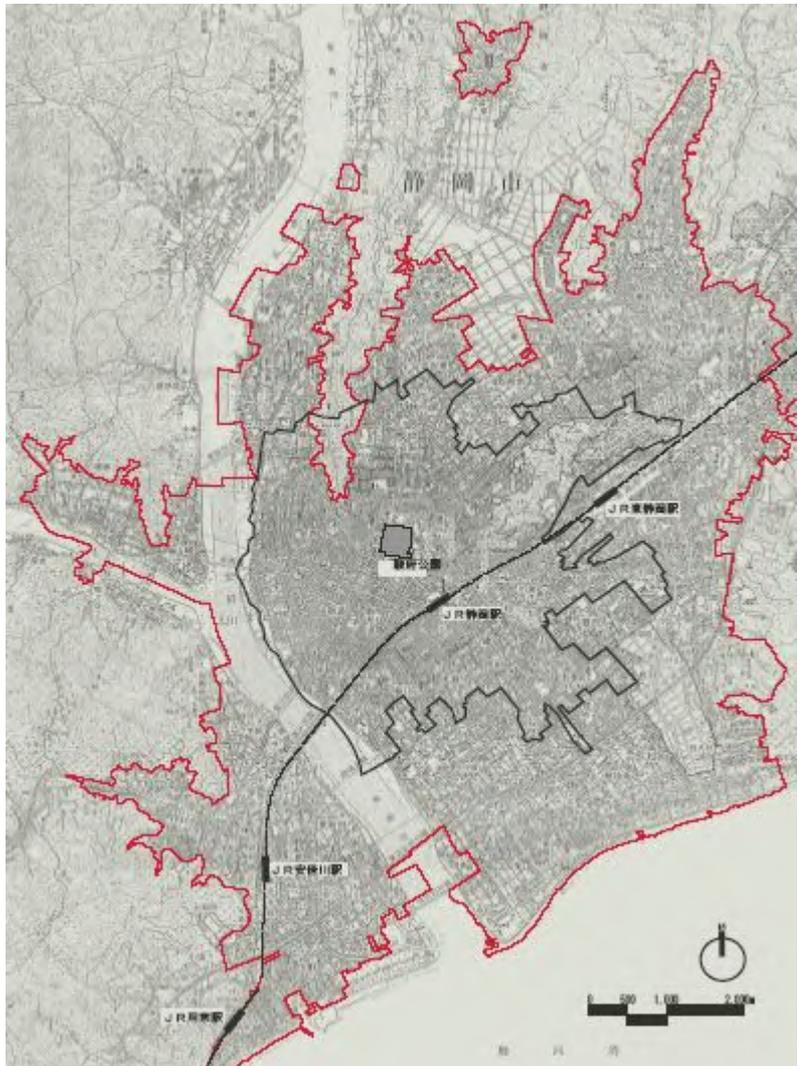
昭和35年のD I Dの区域は、駿府公園を中心に四方に広がった区域であったが、平成12年には、北東、南、南西地方面に大きく伸びていることがわかる。

麻機地区方面への拡大区域は他と比べると大きくないが、麻機地域の北地区は既成のD I Dから飛び出したD I Dを形成している。これは、住宅団地が建設されるなどによる人口増加によると思われる。

■人口集中地区の人口及び面積の推移 資料：各年国勢調査



■昭和35年と平成12年のD I D区域図



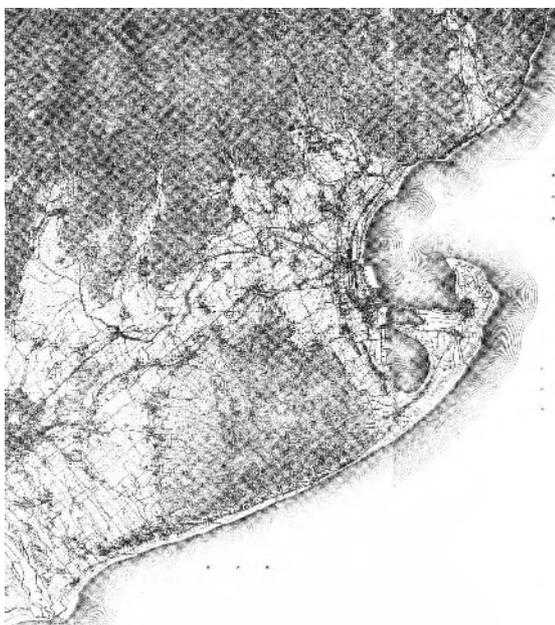
資料：平成35年、平成12年国勢調査

<地図に見る市街地の変遷>

■明治時代の地図



■大正時代の地図



■昭和 58～61 年の地図



(資料：記念誌大谷川放水路)

(4) 水害の歴史

麻機村の近年の歴史を見ると、明治から大正にかけて、毎年のように大洪水に見舞われていることがわかる。

| 西紀 | 年号 | 麻機関係 |
|------|-------|-----------------------------|
| 1854 | 安政元年 | 安政大地震 |
| 1868 | 明治元年 | お泊まりさん |
| 1875 | 明治8年 | 石高政を廃止反別性により地租改正 |
| 1875 | 明治9年 | 土地の測量が始まる |
| 1880 | 明治13年 | 株場事件 |
| 1881 | 明治14年 | 大審院上告 |
| 1889 | 明治22年 | 村制施行 初代村長 織田喜作 |
| 1890 | 明治23年 | 大洪水 |
| 1891 | 明治24年 | ラムネ流行 |
| 1892 | 明治25年 | 静岡大火 |
| 1897 | 明治30年 | 大洪水 |
| 1898 | 明治31年 | 大洪水 |
| 1899 | 明治32年 | 和歌山よりネーブルオレンジの苗購入し、村内に配布 |
| 1900 | 明治33年 | 大洪水 |
| 1901 | 明治34年 | 浅機街道着工 |
| 1902 | 明治35年 | 大洪水 |
| 1903 | 明治36年 | 浅機街道竣工し、県道に編入。大洪水 |
| 1908 | 明治41年 | 大洪水 |
| 1910 | 明治43年 | 大洪水 |
| 1911 | 明治44年 | 大洪水 |
| 1914 | 大正3年 | 大洪水 |
| 1915 | 大正4年 | 大洪水 |
| 1918 | 大正7年 | 私設消防創設。巴川の改修古庄まで終了 |
| 1920 | 大正9年 | 大洪水 |
| 1921 | 大正10年 | 麻機産業組合創立 |
| 1922 | 大正11年 | 乗合い馬車営業開始 |
| 1923 | 大正12年 | 大洪水 |
| 1924 | 大正13年 | 忠魂碑建立 |
| 1925 | 大正14年 | 柑橘一元集荷 |
| 1926 | 大正15年 | 大洪水 |
| 1927 | 昭和元年 | 株場事件大審院訴訟判決の結果全村分割決着(1戸4反分) |
| 1928 | 昭和2年 | 市のゴミ捨て進む。大洪水 |
| 1929 | 昭和3年 | 大洪水 |
| 1932 | 昭和7年 | 山下自動車バス営業開始。大洪水 |
| 1933 | 昭和8年 | 市村合併。麻機尋常高等小学校と改める |
| 1936 | 昭和11年 | 市道池ヶ谷ハッ口間6mに拡幅 |
| 1939 | 昭和14年 | 婦人もんぺを着用 |
| 1940 | 昭和15年 | ザリガニ増える。漆山荘落成。柑橘一元集荷 |
| 1944 | 昭和19年 | 麻機産組改組 |
| 1945 | 昭和20年 | 麻機農業会発足 |
| 1946 | 昭和21年 | 電発始まる |
| 1947 | 昭和22年 | 麻機川改修2次工事竣工 |
| 1956 | 昭和31年 | 安東中学に統合 |
| 1959 | 昭和34年 | 土砂流入被害大 |
| 1960 | 昭和35年 | 大洪水 |
| 1961 | 昭和36年 | 麻機小学校校歌ができる |
| 1974 | 昭和49年 | 台風8号((七夕豪雨)の猛威大被害 |

(資料：麻機誌)

(5) 巴川の治水

巴川の治水については、麻機地区の各村をはじめ沿岸住民の血と汗との歴史が読みとれる。

①概観

i 巴川の川さらい

巴川は古くは「江尻川」と呼ばれていたらしい、巴川には北側から長尾川、南側からは後久川、吉田川などが合流してくる。しかし、巴川は麻機から海までの高低差がきわめて少ないので、合流する川から排出される土砂がすぐに堆積してしまい、水流が滞って周辺の耕地が冠水する。したがって常に排水に心を配っている必要があった。合流点に溜まった土砂をかき出すのは水の落口をもつ村の責任であった。

流域の村むらはこうした問題には早くから自主的に対処してきたが、享保15年(1730)に村むらが合同して大規模な浚渫工事(洲浚普請)が行われた。

駿府代官の指揮のもと、村高に応じて延べ5万1112人が動員されたという。そして翌年からは、毎年村高に応じて人足3000人、1日あたり米1升の扶持米での「定浚」が行われることになった。この形式での浚渫工事はこのあと長く続いた。

ところで、ここで困った問題が生じた。排出土砂の捨て場である。たとえば、吉田川と巴川との合流点では、さらった土砂が高く積もってしまい、中吉田から竜爪山にマグサを採りに行くための道が通れなくなった、という訴えすら出ている。後の話、『庵原郡誌』には、長尾川の下流にある松林の小山は、長尾川と吉田川を浚渫した時の土砂が溜まったもの、と書かれている。

土砂を麻機沼に運んで深場に捨てようという計画もあった。かきあげた土砂は舟に積んで運ぶという。そのための専用舟が20艘必要になるが、うち10艘は公費で、10艘分は拝借金で建造し10年賦で返済する、というものである。この計画に対し、公費の10艘は2艘にした上で許可はおりたようだ。

ただし、この計画が実行されたという記録はない。

仮に大々的に沼に捨てるとなれば、逆に沼の遊水機能が低下するから排水路を造らねばならなくなる。どちらにしても、厳しい話であった。

なお、この文書のやり取りのなかで、上ヶ土新田・川合新田・下足洗新田・南村の4ヶ村に、作場船すなわち日常の農作業に使う船が46艘あると記されている。戦後の写真にも小さな川舟が写っている。この地域の農業が水との戦いの連続であったと同時に、その水をうまく生かした暮らしを営んでいたことを物語っている。このような環境に大規模に適応しているのが有名な茨城県の水郷である。開発の方向が違えば、このあたりが駿河の水郷になっていたかもしれない。

(資料：記念誌 大谷川放水路)

ii 長尾川の流路付け替え計画

洪水対策と新田開発を目的に長尾川の流路を付け替えようという計画もあった。

早くは元禄15年(1702)、伝馬町の惣左衛門らの提案がある。河道の付け替えにより田地は四、五百石分潰れる代わりに新田が千石余りでき、洪水も防げるというものだ。

ところが、地元からは、かえって被害が出るだけだという反対があって許可はおりなかった。

次いで享保9年(1724)には18ヶ村が新規の計画をたて、江戸町人と共同で実施の段階までいったが中止となった。これは同13年にあらためて申請を出した江戸町人の神沢清助に工事の許可がおりたが、工事方法がずさんであるとして中止を命じられた。清助の工事はよほど乱暴なものだったらしい。このあと、何回も後始末をきちんとしろとの要求が村から出されている。結局、長尾川の付け替え工事は実現しなかった。

天保14年(1843)には老中水野越前守の命で、幕府によって大規模な流路変更工事が着手されることになった。15歳以上60歳までの男子をすべて動員し、排水のための掘割工事を始めたが、これも政策変更によって中止のやむなきに至った。千代田村の上ヶ土、有度村の掘込にはその跡が残っているという(『安倍郡誌』)。

(資料：安部郡誌)

iii 果てしなき浚渫作業

巴川の浚渫作業は、いつ果てるともない繰り返しであり、沿岸の村むらには大変な負担であった。

そこで費用をまかなう方策として、江戸時代後半になって急速に発展した町人の経済活動を利用する計画がたてられた。元金を設定して貸付け、利子を貯め込んで十分な資金を作り、次に改めてそれを貸付け、その利子を工事費にあてるという仕組みである。

『巴川治水沿革誌』掲載の文化3年(1806)の文書によって具体的に説明すると。

まず、最初の資金は1500両。そのうち300両は調達金といい、数年前から関係村むらが日掛けで貯めてきた資金、1000両の才覚金は幕府およびその周辺の商人8人が出資、残りの200両は幕府の金蔵から融資、という内容である。これを役所が希望者に貸付け、出資者には一定の利子を払いつつ15年にわたって利子の一部を貯めていく。15年後、商人や役所から借りた金をすべて返済し終わった時、手元には3800両ほどが残る。これを改めて役所を通じて貸し付けていけば、計算上は年々の利子だけで十分工事費を賄える。こうしたやり方は当時広く行われ、静岡の浅間神社社殿の修復を目的にした資金は「浅間金」と呼ばれた。巴川の計画も実際に行われ、やがて明治維新を迎えるのだが、大きな変革のなかで官辺に貸した金は回収できなくなったと記されている。

(資料：記念誌 大谷川放水路)

②時代別の治水

時代別に治水の状況を次に示す。

i 江戸期の治水

駿河記によると巴川改修は、おそらく慶長十八年(1613)徳川頼宣の命によるものが最古のものではないかとしている。旧村誌は浚渫事業の項のもとに、改修事例として正徳元年(1711)以降のものを年代のみ列挙しているが、前記慶長時を含めて、もう少し早い時期から改修がはじまっていたのである。「巴川治水沿革誌」(大正五年1916年刊、以下『沿革誌』という)に多くの詳細な事例を載せている。

「沿革誌」は元禄七年(1694)の中富田村年貢割付文書から、元禄七年当時すでに巴川浚渫工事が行われ、その工事のため年貢の軽減、浚渫土の置場所分の年貢減免が認められていたことが記述されている。元禄十六年(1703)5月には浅畑沼新田開発請負人(駿府町人たち)が巴川から浚渫した土砂の置場を中吉田村地内に設け、その場所(つぶれる畑)の年貢を請負人が負担しようと駿府代官に申し出ている。この文書の中に「自分入用金を以て浚い^{さら}仕り」とあるのは、新田開発に伴う巴川改修を自弁で施工ということである。

正徳五年(1715)正月の代官所宛の文書では、この年にも瀬^{せざら}浚い御普請(岩崎文書)があり、村内三ヶ所もが土砂置場にされることに對し村からの苦情・抗議であった。さらに同年7月には中吉田村民は実力行使に出で、吉田川・巴川合流点の工事場を切り崩すという事件が起っている。これに對し後述の18村より中吉田村支配の曾我周防守に對し口上書による訴状が出された。

この訴状からも、すでに元禄六年(1693)にも代官直轄工事があったことがわかるが、ともかく、浚渫工事により損害が生ずることは中吉田村にとって我慢のできないことであつたと思われる。

18ヶ村とは、上土・下足洗新田・川合新田・川合・南沼上・国吉田・古庄・下足洗・柳新田・北安東・池ヶ谷（名主儀右衛門）・南（名主十兵衛同伊左衛門）・有永（名主佐平次）・羽高（名主左衛門）・浅畑新田（名主孫兵衛）・北（名主太郎左衛門）・東（六左衛門）・下

巴川の蛇行緩流が水害多発の原因でもあったが、さらに長尾川の合流によって、その流出する土砂が堆積するので水害の誘因ともなり、そのため、いわゆる「瀬^せ浚^{ざら}い」を繰返さざるをえなかった。そこで長尾川付け替えによって、巴川の土砂堆積を防ごうという発想が生まれ、三回も試みられた巴川治水^{えんご}の掩護計画であった。

享保九年（1724）8月に前記十八村より提出された計画文書（岩崎文書）からは、長尾川を一の瀬～鳥坂村二の宮間の旧河川敷に付け替えて巴川の通水と長尾川土砂の流出防止とをはかり、巴川浚渫工事の難を免れようというものであった。それに加えて18村1万石の田地を水害より救い、巴川の水はけをよくして「沼」の干拓によって六百石の新田造成、及び従来の巴川工事は各村持ちという、まさに一石三鳥四鳥のプランではあった。

しかし、この計画をもって、上京して訴願し、各村の名主たちが代官所にて事情を聴取され、「御見分」をうけ、一の瀬間の検地も役人の手により実施されたが、新水路完成の文書が現在見つかっていないところから、結局は実現をみなかったと思われる。

このことがあってか、巴川治水は享保年中大躍進をとげることになる。すなわち、享保十五年（1730）12月23日付の幕府^{くじ}公事方役人（勘定奉行たち）から駿府代官山山田治左衛門への指令によって、巴川の「定^{じょう}浚^{さらい}御普請」（公費による定例浚渫工事）が拡大定型化された。沿岸各村（天領一幕府直轄領・私領の別なく）からの供出人員・給付米・土木工法・見廻役（名主）など細かく指示されている。

また、この時代、38ヶ村文書の中にも新田地主として「神沢清助手代茂七」が署名していることから、享保時代に一種の流行をみた町人請負新田の一つの手本であり、町人資本の農村進出の例証としてあげられる。

この開発した新田への年貢について、「反高場^{たんたかば}」とか段高とも書かれ、開発されたばかりの新田などで、地質が粗悪であるか、または容易に水害を受けるような不安定な耕地には、ただ反別だけを表示し課税率たる^{こくだか}石高をつけない土地をさしていったものである。年貢は納めるが低率で、高掛物^{たかがりもの}（田地の生産高を標準として課せられる諸掛や村役）は課せられないのが通例であった。

この反高場は江戸町人清助が手を引いた後は各村に分譲された説と、時には駿府町人（四人）が関与して開発に当たったこともあり、巴川浚渫負担金のことや、改修が進めば反高場も良田に変わっていくので各村の思惑も錯綜したことなど相重り、上土新田その他の村々と「浅畑沼反高場組合村々」との間に、いわゆる「反高場差^{さしもつれ}纏一件」文化十四年（1817）より文政三年（1820）という紛争に発展し、嘉永五年（1852）に慣例尊重ということで示談（仲介人の一人に土太夫町萩原四郎兵衛）が成立した。（橋本文書）

宝暦四年（1754）12月には「駿州巴川通所役浚免除願吟味口書一件ならびに沼新田請負人願筋御吟味」という長い表題の文書が、瀬名川・中吉田・中郷・楠木・堀込の五村から提出されている。その内容は巴川工事の「御手伝」の免除訴願であったが、不許可となった。

18ヶ村は（古庄・国吉田・北安東・池ヶ谷・南・羽高・有永・東・北・上土新田・下足洗新田・川合新田・川合・下足洗・上土・豊地新田・受新田、豊地新田は「駿河志料」によれば安政二年（1855）新開の地となっている。）「巴川浚組合」あるいは「定^{じょう}浚組合」を組織し、この組合の事業として巴川浚渫作業が年々進められていった。

そこで問題になるのは「河浚い揚げ砂利」の処理をどうするかということであった。

これまでのように「両川縁^{べり}に揚げ置」いていたのでは、兩岸堤防が高くなるばかりであり、潰れ地も出来、前述のように中吉田村に砂利置場を設けなくてはならなくなり、堆積場には借地料を払うことなどの事態が生じてきた。

宝暦五年（1755）1月15日付、江戸御普請役宛文書には、その解決策として、揚げ置いた土砂を舟で浅畑沼へ運んだらどうか、そのため「一ヶ年五百人、三年で千五百人を十ヶ村の自弁で動員するから、舟の建造、竹木諸道具その他の経費を公用にて負担願いたい」との意見具申をしている。これに対し役所側は、船をも自弁すれば、村々の意向通り、沼への土砂運搬を許可すると回答してきた。

村方としては、それでは負担過重であるとし、砂利運搬船二十隻のうち十隻を公費建造とし、残十隻の建造費四拾両拝借（十年賦返済）の案を以って伺いを立てた。のちこれを改めて二十隻建造するが八十両拝借（十年賦返済）、人足五ヶ年二千人（一ヶ年四百人、一日の賃金永二十一文六分自弁というように訴願し直した。）

翌六年（1756）4月、幕府より裁断が下され、前述のように中吉田村等の工事手伝免除願は不許可にはなったが、若干の軽減はあった。

18ヶ村請願の砂利処理の件は、時の駿府代官大屋奎之助に請書（瀬本氏提供文書）を提出して承諾しているのが、実施したいと思われる。

寛政に入ってから治水関係は、寛政八年（1796）東村名主彦左衛門の日記の中に散見される。

上土小橋より能嶋橋まで三千七百五十六間を改修工事区域とし、さらに「大沼ちやうし口より小橋まで千三百八十間」を「新川」願いとし、この両者の経費のうち三百両は十八ヶ村にて分担し、残額は拝借としたいと願っている。

長尾川の水を田ヶ谷よりトンネルにて大沼に導き、沼の排水促進と巴川氾濫防止を企図したものであったが、役人たちの裁定で長尾川新川・上坂トンネル通水計画は実現をみなかった。

「トンネル通水」の構想は羽鳥村名主石上藤兵衛にもあった。彼は遠藤新田の五郎太夫・安倍口の善右衛門・与左衛門新田の喜八・茶町二丁目甲州屋庄兵衛らと共同して、安倍川・浅畑沼・巴川の治水開発を企画した。すなわち遠藤新田地元で安倍川をせきとめ、鯨ヶ池に入れ、桜峠を切り割り、水を浅畑沼に落す。大雨毎に安倍川の水が土砂を運んで浅畑沼に堆積する。水量の増した巴川は舟航がより便となる。堰のため水がなくなった遠藤新田より下流の安倍川の川敷は開墾して田とする。土砂で埋った浅畑沼もやがて新田とする。という雄大な計画であった。しかし、この計画もまた実施されなかった。（飯塚伝太郎氏著「静岡市の史話と伝説」より）。

治水工事は、連年定期行事として継続されていたので、労力負担はもとより経費の支出もかさみ、この支弁方は各村にとって重大関心事であった。そこで官・民一体となって出資し積立金によって工事費を捻出しようとの企画が生れた。文化三年（1806）6月に駿府代官小野招三郎左衛門が御勘定所（勘定奉行）に提出した伺書（古谷文書）によって、その計画を見ることができる。

まず「浅畑沼付御料・私領拾九ヶ村組合」（北安東・上ヶ土村新田・浅畑新田・沼新田・下村新田・古庄・国吉田・北・東・羽高・有永・南・池ヶ谷・柳新田・川合・南沼上・川合新田・下足洗・同新田）が千五百両を基金にして、借入金の据置期間・利子積立・元利年賦償還法等を定め、十五年後の文政四年（1824）に返済後の利子四百六十五両余をもって巴川工事を施行しようというものであった。15ヶ年間の定例浚い工事は人足三千人の「定式」として各村負担するが、文政四年（1821）以後は「定浚御普請」（幕府直轄工事は取りやめ、積立金が「永久巴川水役御普請金」となる計画であった。文政九年（1826）よりいわゆる「定浚仕法利金」による工事が行われるようになった。

清水市史によれば天保十年（1839）4月に沿岸43ヶ村より幕府に対し、巴川の屈曲を直し、流路をゆるやかにする「瀬直し」打願書が提出された。これは天保四年（1833）の凶作以来、沿岸農民の強い要望によるものであった。流域各村はその所属（天領・旗本領・私領）の別や工事により被る田畑の損害の多少、治水完成後における受益度の格差等々をのりこえ、大同団結して意志統一をはかった結果、資金のメドも立ち、設計図も完成して幕府の許可を待つのみであったが、幕府は財政難を理由に不許可とした。この瀬直し計画は明治39年（1906）に再生したという。

「天保十四年（1843）5月付の「巴川新替積立帳」によると総額貳千三百二十六両永六百五十三文九分一厘となり、巨額な計画であったので、幕府の中止命令により実現しなかった。

なお、この工事には清水湊より巴川經由構内町までの「通船路」を啓開しようとして「通船路御普請」でもあった。

着手は上土村巴川境より構内町水落まで。昨年9月より本年弘化元年（1844）正月中、上土村人家の処堀割南側とも石垣落成した。（今あるところの石垣）。また、巴川通りも着手して、三日間堀割りしたき、江戸より御用状来り、堀割見合せとなり、そのまま廃止してしまった。そのため、本年6月ごろより石垣用に取立てたる石が不用石となった）。

この石切置たる山々は、安倍郡富厚里村・浅畑村・瀬名村・清水山・愛宕山等であった。不用石は翌15年弘化元（1844）7月26日に、沓谷・上土新田・東・瀬名・富厚里・井宮・青木・東新用の八ヶ村に払下げになって、この未完成通船路一件は結末がついた。いわゆる「巴川通舟」は巴川自体の清水港までの通運で「新風土記」に記載がある。幕末にいたるまでは、既に述べたような「定式普請」によって巴川治水は続けられてはきたが、それにもかかわらず、なお「自普請」（自費工事）をせざるをえなかった。

安政三年（1856）4月の申合証文（清水市史資料『望月文書』）にみるように、沿岸14ヶ村が「巴川^{べり}面縁、竹木生下り伐り払い弁に附洲・出崎等切り広げる」作業を相互に取極め、「洲^{べり}凌い」も毎年実施し、その「人足入用は村々高割り」で必ず掘出ししようということを申合せている。

安政七年（万延元 1860）3月1日付の村廻状（岩崎文書）は、田の植え付け前に「巴川通り両川緑草木の切払い」を告げ、同4月8日付廻状（岩崎文書）には、「定^{べり}浚い」では間に合わないの、各村の自普請で、浚渫を実施しようとの趣旨が盛られている。

このように村々が自己負担で水防に当らなくてはならなかったのは、結局は幕府（代官所）・藩（小島藩）・旗本などの財政逼迫のため治水事業に対し「不行届」になったからである。

よって、慶応四年（1868）8月にいたって、これまで行われてきた定例の浚渫方式では不十分であり、ことに長尾川の押出す土砂を除去するため、組合21ヶ村が「瀬替普請」を計画した。その経費は各村が納める「御物成」（雑税）の中から支出し、5ヶ年の年賦で返納するから、この計画を実施して欲しいと願い出た。（沿革誌）

これは同年7月の「大満水」による水損が激甚であったため、この願書となったものである。しかし、幕末—明治の変革期に際会したため、この願いは達せられなかった。

さらに、沿岸村々にとって打撃だったことは、前述した定式普請用の積立金（定竣仕法積金）を代官所が流用貸出しを行い、利子稼ぎをしていたところ、これが「コゲツキ」、各村々へ工事資金を交付することができなくなった。

（資料：麻機誌）

ii 明治以降の治水

幕末になって、巴川の「自普請」がふえてきたことは前述のとおりであるが、明治新政府になっても、さし当たり事態は改善されず、各村々は自前で治水事業に当らざるをえなかった。

すでに前述のとおり、各村々は定浚組合あるいは水腐組合の名のもとに加盟し、18ヶ村（時に下村をも加えて19ヶ村）が共同で巴川治水に取り組んできた。

これが明治10年（1877）12月に改組されて、18ヶ村で「巴川浚渫水利土功会」を設置したと記している。

前述のように、旧幕時代を通じて「巴川定式普請」のため、各村が苦心積立の工事資金が幕府互解とともに、これを失ったので、各村々は、ここに規約を改め新発足することとなった。明治10年（1877）12月「巴川定式仕方約定」なるものを申合せ、従来の18ヶ村の「組合」を継続することとした。（千代田村誌はこの時の組合名を「巴川浚渫組合」としている）。

この規定によると各村の負担金は田一反につき金二十四銭（類外田一反につき十三銭）。畑一反につき金十銭を拠出するとなっている。

そのため、「吾等組村の興廃存亡」をかけ、普請を続行することとしたのである。

その時は、町村制施行の準備期に当たっていたので、旧村から新村への切り替について、諸問題処理の論議があり、新村長の下に新麻機村が機能していたが、巴川治水については、この明治21年10月12日付の「規約書」（橋本文書）に土木・浚渫工事を継続していくことを「確約」しているのである。

翌明治22年（1889）より30年（1898）までは「水利土功会」（或は「巴川浚渫水利土功会」・「灌漑用水土功会」）の名によって、巴川治水は経営がつづけられた。

明治31年（1898）5月に至り、町村制第百十六号にもとづき、前記18ヶ村は、それぞれ安東・麻機・千代田・豊田の四村に分属し、従来の組合は「千代田村外三ヶ村浚渫組合」となり、大正元年（1912）まで引続いて治水作業に当った。

ところが、これと併存して、明治37年（1904）12月より「巴川水害予防組合」が設立認可されており、大正2年（1913）までは、前述「土功会」と二組合両立の形を呈していた。この二組合の業務分担は必ずしも明確ではないが「沿革誌」によれば、旧来の浚渫組合は通常の「洲浚い」を、新しい予防組合は、主として改修工事の事務を行っていたことになっている。

この組合費の賦課は反別割と家屋割の二本立で、田一反につき二十四銭、田・宅地一反歩につき十銭および家屋一戸につき一律四銭であった。これを翌39年（1906）7月に改定した。

宅地・畑は全区一律、一反歩につき三銭、家屋一戸あたり二銭五厘とされた。地価の安い土地ほど反当り賦課額が多い。これについては同組合より県知事宛の申請書の中で理由づけがなされている。反当地価十円未満の土地は最悪条件下にあるので、当組合事業によっても「全ク害ヲ除クコト難カルベキヲ以テ」の例によらず、適宜の率を定めたとしている。

この負担額はその後二回、大正14年（1925）及び昭和2年（1927）改定があった。各村々はこのような定例負担の外に工事に伴う起債償還をも引受けねばならなかったのも、村の拠出は相当額に上ったといえる。

この水害予防組合発足の年、同組合が企画した「河身改修」計画（橋本文書）に基づき、水害予防組合が強力に治水工事を推進するようになったので「同功一体」の観のあった従来の浚渫組合との合併の議が起り、大正2年（1913）10月13日付をもって笠井信一県知事の認可により、旧来組合が全財産を無償譲与ということで、二組合は「水害予防組合」として一本化が成った。

しかし、連年の組合費負担と水害続発という、いわば二重苦は村民にとって「費用ノ重キニ堪エザラント」する状況であった。

大正11年（1922）5月の内者省告示にもとづいて、関係各村・組合は巴川を県費支

弁による河川編入を計画し、組合内に臨時委員会を設けて県知事に村し陳情運動を起こした。

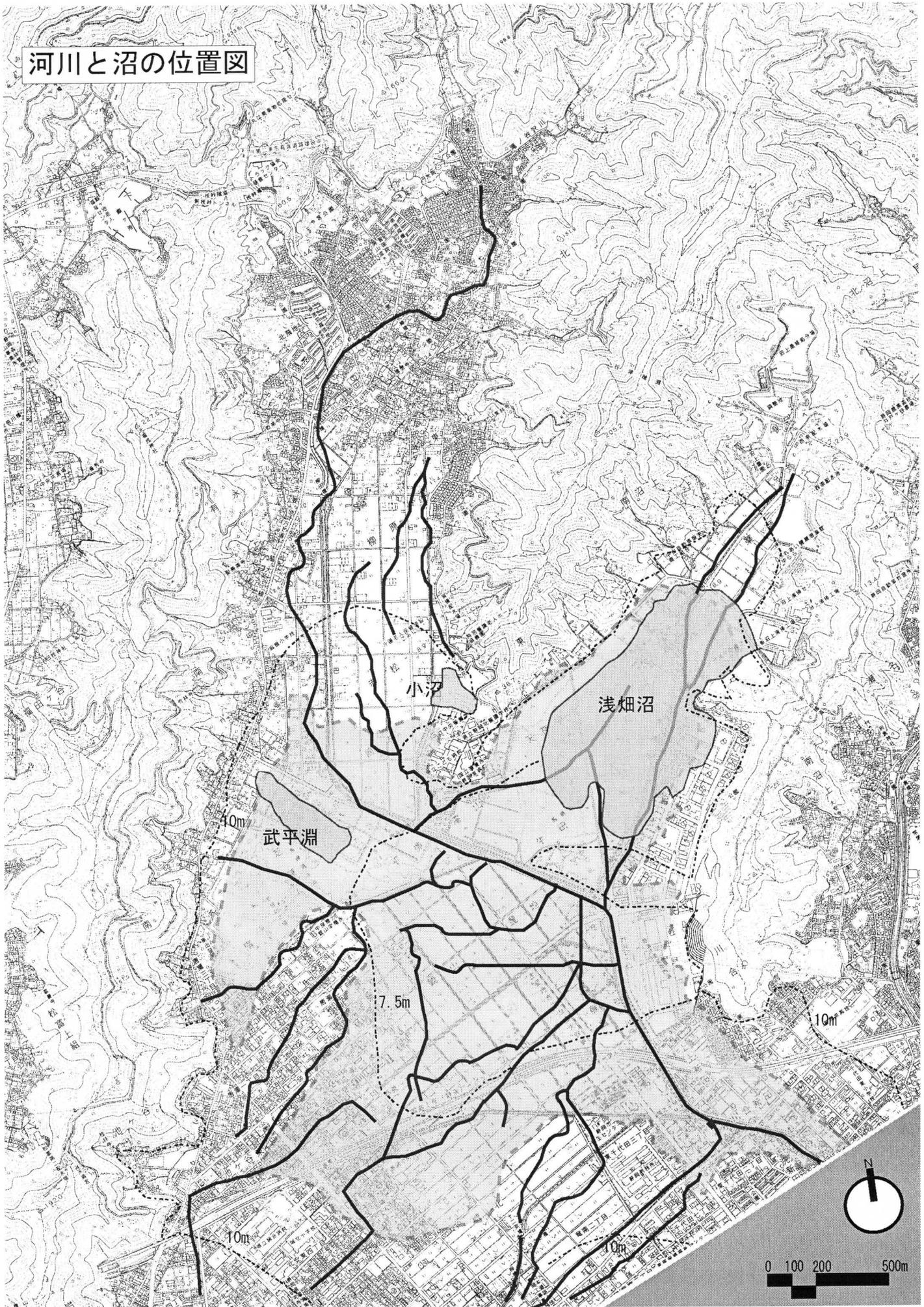
この結果、昭和2年（1927）12月26日長谷川久一知事の認可により「巴川水害予防組合」は廃止ときまった。同年の通常県議会の議決を経て、翌3年（1928）7月21日付静岡県告示第四〇四号により、巴川は他の17河川とともに「河川法準用河川」として認定された。

こうした背景の中、昭和40年から50年頃には、高度経済成長とともに巴川流域の市街化が進み、台風などの大雨によって浸水被害が発生するようになった。

昭和49年7月7日から8日にかけて発生した「七夕豪雨」は巴川流域の総合治水対策事業への取り組みの契機となった。

（資料：麻機誌）

河川と沼の位置図



凡例 旧浅畑沼南西部の最大推定範囲 近世後期の沼地の範囲 明治期の河川

(6) 交通

①船運

麻機地区では、十分な道路が無い代りに舟に依る交通は非常に大切であった。明治5年頃の文書を見ると、舟の長さ四間四尺、幅四尺二寸で底の平な舟で、南で六人の所有者の名前を知事宛に申告しているが、その後、近代まで多くの人々が舟を所有している。

舟で稲を積んできたり漁猟を行ったり、清水からの荷物の運搬などを行っている。

巴川沿岸は湿田であるため、住民は舟（農家は耕作船を持っていた）を利用することが多い。田植えともなれば、女は舟に乗り、男が細い道や畦道から舟を曳いていく。

舟の耐用年数は約10年であり、駿府の商人や金貸しから10年賦の借金で造った。

一般の通行や、米穀、醤油などの貨物輸送には、耕作船を使うことは禁止され、長さ8m余、幅約1mの「小廻り船」と言われる5石舟を利用し、舟は一目でそれとわかるように、赤い布を付けた竹竿を、舳先に立てていた。

江戸の末期、麻機地区が小嶋領だった頃は、殿様が舟で柳新田から東村の肥付右辺まで乗って来ているし、御年貢米も有永の郷倉辺から舟で清水まで運んでいる。南の郷倉は八ツ口の舟付き場から出されたと思われる。今も舟付きの地名が残っている。昔は水も多く沼も広がったと推察される。唐瀬にある更新そば店の横が舟付き場だった。谷久保沢尻も絶好の舟戸（ふなと）であった。

昔、東村の石神付近から静岡浅間神社の石鳥居を刻んで、たくさんの舟をつなぎ合せて、その上に乗せて漕ぎ出したが、漆山の近くで舟が転覆して、鳥居の一本が落ちてしまった。最近まで落ちた所を棒でつくつと、割合浅い処でこつこつと当たりがあったと言う。その他は十二艘川をさか登って輸送して行った。今でも十二艘川は竜南小学校の横に残っている。

(資料：麻機誌)

②巴川運河

戦国時代を経て、家康が天下を統一した。家康が腰をすえていた当時の駿府は実質的に日本の首都であった。権力基盤を固めるうえで家康が描いた計画では、駿府城に海から直接物を運び込むための運河を造るはずだった。

これは、駿府を経済の中心にするために不可欠の課題である。当時、大量輸送は海と川によっており、全国の城下町のほとんどはこうした交通の便を前提に造られている。家康にとってはぜひとも実現させたい計画だった。

実際、駿府城の石垣を築くために周辺の山から切り出された大量の石の一部は長尾川の上流から川をつかって運ばれている。もし清水港から直接駿府城の堀まで舟がやってくるようになれば、清水港は静岡の市街地と有機的に結びつき、静岡・清水は今とは全く違った発展をしていた可能性が高い。

さて、駿府城のお堀の水源のひとつは、安倍川上流の鯨ヶ池である。池から安倍街道に沿って南下する水路には、安倍川岸に設けられた水門から取水された水が合わさって堀に達する。そして余った水は、外堀の東角に造られた水門から構内川に排出され、北街道に沿って上土まで流れていく。

江尻から巴川をさかのぼれば上土までは舟が入る。だからこの構内川を拡幅すれば運河になる、という計画であった。ところが工事に着手すると同時に大量の水が吹き出し、成功の見込みは皆無、ということがすぐにわかったらしい。即日中止になったとされている。

家康以降、何回もこの計画はもち上がったが結局は実現しなかった。一説によると、運河のかわりに駿府と清水とを結んだのは牛車であり、この業者が反対したからだともいう。

新規参入を妨げる風は昔もあったとみえる。

(資料：記念誌大谷川放水路)

③渡し船

昭和20年代まで、麻機沼に渡し舟があった。当時の地図を見ると大きな沼を横断して航路が引かれている。

(資料：記念誌 大谷放水路)

④道路・交通

麻機新道が設けられる以前は、すべて徒歩であったが、街道の完成を見ると農車の全盛時代となり、運搬の重要な手段となった。

車の製造所は現在の旧清水市元有度村平川地にあった。村内の荷車は概ねここで造られたものである。

自転車は明治43年頃2、3台のみであったが、大正の末年から昭和3年頃にかけて1家に1台以上と所有台数が増加し、昭和9年の市合併時には登録1,600台を記録している。

人力車は、明治・大正時代に幡谷医師が1台所有のみであったと言われている。

乗合馬車は、大正の末年頃1台あり、始めは北村から後には池ヶ谷の端から浅間前まで不定期に営業していた。大正5年頃自動車を見るに至り、やがて昭和7年山下自動車会社がバス運行の許可を得て、後に静岡電鉄となって今日に至っている。

(資料：麻機誌)

4-4 麻機遊水地の風土・史跡

1) 風土の資料整理

(1) 地名

① どうして麻機の名が生まれたか

大正元年編さんの「麻機村誌」(原文)によれば、「明治22年町村制組織発布組合戸長役場ヲ廢セラレルヤ、池ヶ谷村始メ外六ヶ村八組織委員ヲ選任シ熟議討究旧浅畑郷ヲ以テ麻機ヲ組織ス。此ノ時ニ当タリ浅畑ノ字ハ麻機ト更正センナリ。是故ナキニ非ズ遠ク天明年間ノ頃ニ麻機村ハ至ル処麻ヲ栽培シ農間織物トナシテ以テ浅畑郷ノ特有産物トシテ各地ニ輸送ス、故ニ自然浅畑郷ノ称名ヲ得シナリ。

然ルニ何レノ年カ麻機ヲ誤ッテ浅畑トナシ其誤リナルコトヲ知ラザリシナリ。然ルニ新村創立当時古書ヲ繙読シテ其誤リナルヲ知り旧ニ復シ麻機村ト訂正ス」と記されている。

ここに始めて麻機村の呼称が固定した。

古谷哲之輔氏は、原文に「遠く天明年間」とあるが、天明年間(1781~1787)は今からおおよそ220年前で遠い時代とは言い難い。天明から僅か30年後の文政3年(1818)

刊の「駿河記」に「古麻を出し、なるべし」と記述がある程度で、「駿河国風土記」天保4年(1833)に浅畑名産として、稻、蓮実、烏芋、鼈、鴛鴦、鶉、常山赤蝦蟇、アツ貝等。

「駿国雑誌」天保14年(1843)には鬼蓮、蘿蔔、胡蘿蔔、菱、鮎、とう砂、青山椒、菱灰、鼈、雁、鳧(鴨)、鷺、梅首鳥(鶉)、告天子(雲雀)、鴛鴦、楊梅等が列記されているが、麻についての記載はどこにも見あたらない。

麻が栽培されて特産とされたことがあったとしても、江戸末期ではなく、もっと古い時代の中世以前のことでないか。

室町頃までは麻服、浅服、麻機、麻畑、浅畑等いろいろに呼ばれていたが、江戸期になってからは大体浅畑に統一して使用されていたようである。

諸地誌の中からの古い呼称の痕跡を見ると

「駿河記」文政3年(1818)では「麻機山」「麻機沼」「服織之庄麻機郷」

「駿河国風土記」天保4年(1833)では「麻機七天神」「駿河の気候物産」麻は安部に麻機という地あり、廬原郡阿蘇宇(麻生なるべし)という地もあれば古麻を出ししなるべし、今も麻苧(苧麻)を作るところあり。

「駿国雑誌」天保14年(1843)では「倭文」安部郡賤機山、浅間社記云。志豆機山は、倭文幡也。倭文機也。神代倭文の神あり、倭文を出す。地主の神也。此山に倭文の神を祭ると云、伝記あれ共、今何れの社を云か詳ならず。又此山の尾崎を麻機村と云。山有り、池有り、土俗浅畑に作るは誤る也。倭文機、麻機、皆織物の土産を云える儀にして、麻機は麻布を出せし所、麻機は倭文を出せし所の名也。云々

「駿可国雑誌」嘉永5年(1852)では「麻機郷」「麻機山」「麻機池沼」

「駿河志科」文久元年(1861)では「麻服山」池ヶ谷村より東村に至り、浅畑と称し、山をも然云ふ。

などいくつかを抜粋したが、「麻機村誌」に古書を繙読したとあるのはこれらの文書であろう。

また、歌枕名寄 読み人知らず 「夜とともにあさはた山に織るものは木々のもみぢのにしきなりけり」この歌の中には織物に関わる意味が多分に含まれているように思われる。近くに、服機(村)があり、賤機(村)がある。麻機もいつの時代にか麻布を名産としていたことには疑いはない。安倍川、藁科川流域には半島系の白鬚神社が多く、久能寺(現

在東照宮)は推古天皇の御代(592~628)秦久義の開創と伝えられている。秦氏は弓月君ゆづきのきみの子孫で、日本国中に殖民し、製塩、養蚕、織布など工業生産に従事して栄えたという。この一帯の機織り技術も帰化氏秦氏繁栄の名残でもあろうか。

(資料:あさはた 創立百周年記念誌)

②麻機小学校区内の地名の由来

羽高(はだか) 有永の北に隣接する地区で麻機7ヶ村の中では最も人口が少なく、石高も小さかった。羽高の地名の由来は明らかではない。

北(きた) 麻機7ヶ村のうち最も奥に位置する。地名は有永から見て北方に当たる方位によると言う。

北村が背後に負う麻機山の一部(通称奥山とも言った)は古くから近隣諸村の秣場まぐさば(入会山)で、江戸時代から明治時代まで、その所有権をめぐるしばしば紛争を起こしている。

東(ひがし) 地名は有永から見て東方に当たる方位によると言う。東町と混同されやすいが、地名としてはずっと古い。

柳原(やなぎはら)・赤松(あかまつ)・漆山(うるしやま)・前橋(まえばし)・平柳(ひらやなぎ) 昭和49年(1974)県営圃場整備事業に伴って新設された大字。地名は旧字名を用いた。

芝原(しばはら) 昭和51年(1976)県営圃場整備事業に伴って新設された大字。浅畑新田を含む麻機遊水地を整備した水田。地名は旧字名を用いたが、巴川の芝地の原と言う意味で、冠水常習地だったことを物語る。

(資料:しずおか町名の由来 飯塚伝太郎著)

③あさはたの地名

○大名小路

南草場部落の中央を山へ向かって登る路を、大名小路と呼んでいた。その小路の突当たりにも今も広大な石垣が高々と残っている。これが杉山太郎右衛門の屋敷跡である。石垣も一段に積み上げると城郭とみなされるため、二段に積み上げてある。この杉山家は相当の富豪であったそうで、いつも銭の勘定整理に忙しかったと言う。当時の小嶋の領主松平丹後守が本村へ来駕の際は必ず休憩所に立寄ったと言う。

また金喜郎と言う主人公は府中の遊郭で小判を七夕竹につるし、遊女達を裸にして小判を取りあうのを見て楽しんだと言われ、こうした豪遊が度々であったそうだ、そうした大名暮らしからか、殿様の通る道の為か、大名小路の名を今に伝えている。

やがて杉山家も衰退の上明治24年春、疫病がはやり付近の住民の多くが亡くなってその難を免れず生き残りし者が他国へ流浪して絶えていった。

○張場

昔浅畑沼から下村の鯨ヶ池へ鴨の群が山を越して往復していた。山を越す時は地上をかすめて通ったために北村や羽高の獵師達は稜線近くへ網を張って鴨をとらえた。この所を張場と言った。張場は峰を境に下村と麻機とに分けられてこれを侵す事は出来なかった。

また、張場は運上金と言って、今の権利金であり税金を納めていた。大沼の諏訪神社の裏の方、沼上村へ越す切通しの所にも張場があり、この鴨の取り方は、非常に面白いと言われて有名であった。

○七所天神

昔麻機に七ヶ所天神を祭ったと伝えられている。駿府城第一加番松平縫殿守足常の管内巡見日記に（寛政八年）

「右の山はなを長崎ばなと言う。天神の祠あり。麻機他のほとり天神の祠七所が在る。この辺にて七ツ天神と言う。同所松下天神。同所平柳天神。麻機漆山天神。同所三杉天神。東村石亀天神。北安東村安東天神。以上七社也。」

そのうち、平柳天神は明治12年1月9日許可の上、南の八幡宮に合祀され、石亀天神（鈴石）は明治12年8月許可の上、東村の日賀美神社に合祀された。

（資料：麻機誌）

④大字・小字名の呼び名

(資料 静岡市の大字・小字名集成 ー江戸時代より現代までー 静岡市立図書館発行、麻機誌)

麻機地区

| 【池ヶ谷】 | | |
|------------------|----------------------------|---------------|
| 大 平 (オーダイラ、オーベラ) | 枇杷沢 (ビワサワ) | 石田 (イシダ) |
| 山ノ神 (ヤマノカミ) | 西ノ谷 (ニシノヤ) | 矢ハギ (ヤハギ) |
| 屋敷添 (ヤシキゾエ) | 東ノ谷 (ヒガシノヤ) | 大ドブ (オードブ) |
| 鬼 沢 (オニザワ) | 神ヶ堂 (ジンガドー) | 當 (当) 目 (トーメ) |
| 天神山 (テンジンヤマ) | 蔵ノ山 (クラノヤマ=池ヶ谷の 郷蔵の上の山) | 鬼ヶ島 (オニガシマ) |
| 大 崩 (オークズレ) | 前 田 (マエデ=池ヶ谷の前の田) | 時ヶ谷 (トキガヤ) |
| 向 山 (ムカイヤマ) | | |

| 【南 南口】 | | |
|--------------------------|------------------------|---------------------------|
| 溝崎 (ミゾサキ) | 唐 瀬 (カラセ) | 時ヶ谷 (トキガヤ・小時ヶ 谷ともいう) |
| 大名崎 (オーナサキ) | ・四十石 (ヨンジッコク) | 蟹 山 (カニヤマ) |
| 茜 田 (アカネダ) | 深 田 (フカダ=深い田) | 神明窪 (シンメイクボ=神明 宮のある久保) |
| 寄 長 (ヨリナガ) | 大曲下 (オーマガリシタ= 大曲の下) | 深 山 (ミヤマ) |
| 下石田 (シモイシダ) | 鬼ヶ島 (オニガシマ) | |
| 上石田 (カミイシダ=石の多い田) | 鬼ヶ島坪 (オニガシマツボ) | |
| 永見寺下 (エーケンジンタ= 永見寺の下) | 大時ヶ谷 (オートキガヤ) | |
| | 芝 (シバ) | |

| 【南 南中】 | | |
|---|-------------------------------|----------------------------------|
| 天神前 (テンジンマエ=天 神久保の前) | 三津又 (ミツマタ=川の分岐) | ・はげんとう |
| 谷久保 (ヤクボ) | ・七曲り (ナナマガリ=巴川 の支流の屈曲した部分) | ・滝不動 (タキフドー=滝の 傍に不動明王を祀る) |
| ・沢 尻 (サワジリ=谷久保の 下、沢の尻) | 川原尻 (カワラジリ) | ・山の神 (ヤマノカミ=峰近 くにある小祠) |
| 長 畑 (ナガバタケ) | 菅 島 (スガジマ) | 崩 沢 (クズレサワ) |
| 草 場 (クサバ) | 八津口 (ヤツグチ) | ・マルズッコウ (丸塚古墳のな まりか) |
| ・大名小路 (ダイミヨーコ ージ=旧麻機街道から草場のヤへ 入って行く道路、現尾藤氏宅の東 側) | ・船止 (フナト) | ・天神久保 (テンジクボ= 聴機七天神のひとつを祀る久保) |
| ・郷蔵 (ゴーグラ=草場とハ ツロの境に所在、年貢米収蔵唾) | 八津喚 (ヤツオク=ハツロ部落 の奥山) | ・蛇山 (ヘービヤマ=大きな蛇 が居たという) |
| 平 柳 (ヒラヤナギ) | ・烏どまり (カラスドマリ) | ・朋れ (クズレ=大雨のたびに 土砂崩れをおこす) |
| | 難場久保 (ナンバンクボ) | |
| | 滝ノ谷 (タキノヤ=不動の滝 がある谷) | |
| | ・殿様生え (トノサンバエ) | |

| 【南 南奥】 | | |
|---------------------------|--|-------------------------|
| 中 村 (ナカムラ) | ・カマン平 (カマンダイラ) | 寺久保 (テラクボ=竹柿寺のあ る久保) |
| ・バンバ (何かの番場があった) | ・権現さん (ゴンゲンサン) | |
| ・堂の前 (ドウノマエ=地蔵 堂があった所) | 牛 転 (ウシコロビ=上土 方面から竹林寺坂をのぼり賤機方 面へ通ずる本道で、牛の背に荷をつ けて山越えをすところ。牛が足を ふみはずして谷底へころげ落ちた ことがある) | |
| 平 山 (タイラヤマ) | | |
| 根 神 (ネノカミ) | | |

| 【有永】 | | |
|--|---|---|
| <p>新田町 (シンデンチョー)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・追ヶ振 (オツカブリ・押ヶ振とも書く=大川の水害により常に土砂をかぶる土地) <p>赤松沖 (アカマツオキ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タヶ四 (ヨーケダ) ・津と田 (ツトダ・苞田とも書く) ・蛭田 (ヒルタ) ・菰田 (コモタ) ・通り出 (トーリダ=整然と区画された田) ・三通り田 (ミトーリダ) <p>向原 (ムコウバラ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・喜備田 (キビタ・喜尾田、黍田とも書く) ・榎田 (エノキダ・榎木田とも書く) ・曲り松 (マガリマツ) ・且久 (カンズキュー、カンズキョー・且祖久、且ぞ久とも書く) ・原崎 (ハラザキ) | <ul style="list-style-type: none"> ・小深田 (コフカダ) ・左口社 (シャコシ、通称シヤモツツァン) ・流れ田 (ナカレダ) <p>=水害により常に土砂が流入する)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地藏 (ジゾウ、地藏前・地藏裏・地藏軒ともいう) ・大井 (オーイ) ・清水端 (シミズバタ=清水が湧いているところ) <p>前田 (マエダ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上ノ前 (カミノマエ) ・割悶 (ワリダ) <p>籠下 (カゴシタ)</p> <p>道東 (ミチヒガシ)</p> <p>道西 (ミチニシ)</p> <p>道中 (ミチナカ)</p> <p>小屋敢 (コヤシキ、古屋敷とも書く)</p> <p>道郡海道 (ドブカイドウ)</p> <p>床上 (モリウエ)</p> | <p>上屋敷 (カミヤシキ)</p> <p>徳永 (トクナガ)</p> <p>天王山 (テンノウヤマ)</p> <p>宮脇 (ミヤワキ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卿倉 (ゴークラ) <p>中屋敷 (ナカヤシキ)</p> <p>井戸ノ上 (イドノウエ)</p> <p>堂ノ前 (ドウノマエ)</p> <p>下 (シモ)</p> <p>前出 (マエダ=岩崎家の前の田)</p> <p>山崎 (ヤマザキ)</p> <p>屋敷田 (ヤシキダ)</p> <p>内坪 (ウチツボ)</p> <p>瀬杯 (セバヤシ)</p> <p>新ナシ (シンナシ)</p> <p>小鎌田 (コカマダ)</p> <p>大鎌田 (オーカマダ)</p> <p>東野田 (ヒガシノダ)</p> <p>新田川 (シンデンガワ)</p> <p>赤糯田 (アカモチダ)</p> |

| 【有永】 | | |
|---|---|---|
| <p>田中田 (タナカダ)</p> <p>梅ノ木田 (ウメノキダ)</p> <p>森下 (モリシタ)</p> <p>柳原 (ヤナギハラ)</p> <p>玉ノ木田 (タマノキダ)</p> <p>喜尾田 (キビタ=黍畑のあったところか)</p> <p>西川原田 (ニシカワラダ)</p> <p>道会 (ミチアワイ)</p> <p>アオリ越 (アオリコシ)</p> <p>楠ノ木田 (クスノキダ)</p> <p>西ノ田 (ニシノタ)</p> <p>惣出 (ソウデ)</p> <p>壱町田 (イチチョウダ)</p> <p>角田 (スマダ)</p> <p>家業 (カギョウ)</p> <p>代官給 (ダイカンキュウ)</p> | <p>三反田 (サンタンダ)</p> <p>船戸 (フナド)</p> <p>割田 (ワリダ)</p> <p>仁ノ地 (ニカンチ)</p> <p>見道塚 (ケンドウツカ)</p> <p>元苗場 (モトナエバ)</p> <p>名召 (ナメシ、旧小沼の地)</p> <p>仁桂久保 (ニツケイクボ)</p> <p>赤松沖 (アカマツオキ)</p> <p>漆山 (ウルシヤマ=漆が植えられていた)</p> <p>小屋ノ前 (コヤノマエ)</p> <p>天神前 (テンジンマエ)</p> <p>沖 (オキ)</p> <p>坂下 (サカシタ、上記の沖とあわせて通称十一石)</p> <p>五林山 (ゴリンヤマ)</p> | <p>沼廻 (ヌママワリ)</p> <p>市ヶ崎 (イチンサキ)</p> <p>柳林谷 (ヤナリンヤ)</p> <p>奥林谷 (オクリンヤ)</p> <p>大谷津 (オーヤツ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・唐人谷津 (トージンヤツ) <p>石神 (イシガミ=鈴石天神が祀られていた)</p> <p>坂道 (サカドウ)</p> <p>北ノ谷 (キタノヤツ)</p> <p>奥ノ谷 (オクノヤ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・郷倉 (ゴークラ、文化2年再建という) <p>船ヶ沢 (フナンサワ)</p> <p>子ノ神 (ネノカミ)</p> <p>倉ヶ谷トウ (クラガヤトウ)</p> <p>仁コメン (ニコメン)</p> |

| 【浅畑新田】 | | |
|--------------|------------|--|
| 小屋ノ前 (コヤノマエ) | 芳柿 (ヨシバヤシ) | |

千代田地区

| 【北沼上】 | | |
|-----------------|----------------|--------------|
| 徳倉坪 (トクラ) | 蛭沢 (ビルザワ) | 山ノ神 (ヤマノカミ) |
| 身洗戸 (ミアライド) | 上屋敷坪 (カミヤシキ) | 麦原 (ムギハラ) |
| 塩田坪 (シヨタ) | 鑄物師山 (イモノシヤマ) | ガツタル |
| 三滝ヶ谷 (ミタキガヤ) | 新床 (シンドコ) | 岩下 (イワシタ) |
| 鳶谷坪 (トビガヤ) | カメクボ (亀久保) | 道白 (ドーハク) |
| 上原田坪 (カミハラタ) | 大久保 (オークボ) | 茨山 (バラヤマ) |
| 小蛭沢坪 (コピルザワ) | 庚申山 (コーシヤマ) | 大棚 (オータナ) |
| ヲゴロ坪 (オンゴー) | 足ヶ谷坪 (アシガヤ) | イモカマドウ |
| 川合野 (カワイノ) | 菖蒲ヶ谷 (ショーブガー) | 大平 (オーベラ) |
| 小屋平 (コヤタイラ) | 小淵ヶ谷 (コブチガー) | 平石 (ヒライシ) |
| クリバ島 | 膳棚坪 (ゼンダナ) | ノタノヲ (ノタノウ) |
| 奥ナマリヨ | 諏訪坪 (スワ) | 冥加沢 (ミヨーガザワ) |
| 無生ヶ谷 (ムショーガー) | 郷道坪 (ゴードー) | 文珠 (モンジュ) |
| 井戸ヶ谷坪 (イドガヤ) | 村下坪 (ムラシタ) | <台帳のみ> |
| 宝録ヶ谷 (ホーロクガー) | 塩沢坪 (ショザワ) | 相坪 (アイツボ) |
| 薬師ヶ谷 (ヤクシガヤ) | 向島 (ムキヤージマ) | 寺前 (テラマエ) |
| 桃ノ木坪 (モモノキ) | 野反沢 (ノタンザワ) | 棚坪 (タナ) |
| 荷取場坪 (ニドンバ) | キリ (ン) クボ (久保) | 北ヶ谷 (キタガヤ) |
| 岩鼻坪 (イワバナ) | コスギ (小杉) | サンサイ |
| 本村坪 (ホンムラ) | 立場沢 (タチバザワ) | コバシケツメル |
| 松尾坪 (マトー) | カシラ (頭) ナシ | <図のみ> |
| 沢奥 (オクサワ) | 地獄沢坪 (ジゴクサワ) | 平野沢 (ヒラノザワ) |
| 宮沢 (ミヤザワ) | 横山 (ヨコヤマ) | 平戸 (ヒラト) |
| 冥加島 (ミヨーガジマ) | 真藤 (マブチ) | 森窪 (モリンクボ) |
| 奥新田 (オクシンデン) | キワダ | 栗橋場 (クリハシバ) |
| 上坂下坪 (カミザカシタ) | 日影平 (ヒカゲダイラ) | <聞きとり> |
| 権八ヶ谷坪 (ゴンバチガー) | 平ヶ沢 (ヒラガザワ) | 大柳 (オーヤナギ) |
| 横ノ上 (ヨコノウエ) | センガ沢 | 小蛭中 (コヒルナカ) |
| 田成ヶ谷 (タナリンガヤ) | サガノ | |
| 北ヤツ (谷津) 坪 (キタ) | 大山 (オーヤマ) | |
| 田ヶ谷 (タガヤ) | 崩沢 (クズレサワ) | |

| 【上土豊地新田】 | | |
|---------------|------------------|------------------|
| 仲割 (ナカワリ) | 鰻川原 (ウナギガアラ) | 牛田 (ウシタ) |
| 野丈 (ノ坪) (ノダケ) | 北小沼 (ノ坪) (キタコノマ) | ニノ沖 (割ノ坪) (ニノオキ) |
| 南小沼 (ミナミコノマ) | 沖割 (オキワリ) | <聞きとり> |
| 天神前 (テンジンマエ) | 姥ヶ谷 (ウバガヤ) | ノザキ |
| | | ハチニンワリ |

| 【上土新田・下足洗新田・川合新田・請新田】 | | |
|-----------------------|--------------|--------------|
| 惣ヶ谷前 (ソーガヤマエ) | みの字 (ミノジ) | 沢尻 (サワジリ) |
| 野丈 (ノ坪) (ノダケ) | 小荒沼 (コアラ) | 三角 (サンカク) |
| 大穴 (オーアナ) | 天神前 (テンジンマエ) | みの字沖 (ミノジオキ) |
| 波止場 (ハトバ) | 波止場沖 (ハトバオキ) | |

| 【浅畑新田】 | | |
|--|--|--------------|
| 二ノ割 (ニノワリ) 中荷土場 (ナカニドンバ) 三ノ割 (サンノワリ) | 小坪 (コツボ) 牛田ノ坪 (ウシダノツボ) 一ノ割 (イチノワリ) | 天神前 (テンジンマエ) |

| 【南沼上】 | | |
|---|---|---|
| 山ノ鼻 (ヤマノハナ) 松下 (マツシタ) 大谷津 (オーヤツ) 奥穴口 (オアナグチ) 上 (カミ) 中外山 (ナカソトヤマ) 佐敷堂 (サジキドー) 大久保 (オークボ) 横町 (ヨコチョー) 無生ヶ谷 (ムショーガー) 郷堂 (ゴードー) 内坪 (ウチツボ) 大石鼻 (オーイシバナ) 外山 (ソトヤマ) 中ノ谷 (ナカノヤ) 北ノ谷 (キタノヤ) ロノ谷 (クチノヤ) 石亀 (イシカミ) 金左工門久保 (キンザンクボ) 立町 (タテジョー) 足ヶ谷 (アシガー) 楠ヶ谷 (クスガヤ) 和田 (ワダ) 姥ヶ谷 (ウバガヤ) 鰻原 (ウナギヤラ) 前田 (ミヤーダ) 大平 (オオペラ) | 御殿場 (ゴテンバ) 坂下 (サカシタ) 赤土鼻 (アカツチバナ) 柚木田 (ユノキダ) 田ヶ谷 (タガアー) 道下 (ミチシタ) 八反田 (ハツタンダ) 高積 (タカツモリ) 二ツ山 (フタツヤマ) 下 (シモ) 中坂東 (ナカザカヒガシ) 森尾羽根 (モリオバネ) 梨ノ谷 (ナシノタニ) 溝辺 (ミゾベ) 法六ヶ谷 (ホーロクガー) 君ヶ谷 (キミガヤ) 穴田 (アナダ) 三滝ヶ谷 (ミタケガー) 惣ヶ谷 (ソーガヤ) 田成ヶ谷 (タナリンヤ) 今宮 (イマミヤ) 榎木場 (エノキバ) 薊ヶ谷 (アザミガー) 藤木田 (フジノキダ) 上坂 (カミサカ) 馬道 (マミチ) 薬師ヶ谷 (ヤクシガー) | 小淵ヶ谷 (コブチガー) 菖蒲ヶ谷 (ショーブガー) 小橋詰 (コバシズメ) 久保田 (クボタ) 丸山 (マルヤマ) <台帳のみ> 丸ヶ崎 (マルガサキ) <図面のみ> 長崎山 (ナガサキヤマ) 奥ノ谷 (オクノタニ) <聞き取り> 兎窪 (ウサギクボ) 高割 (タカワリ) 垂下 (タルシタ) ロノ惣ヶ谷 (クチノソーガヤ) 鳩胸 (ハトムネ) 和田鼻 (ワダバナ) ジンジロ山 (ヤマ) 矢石 (ヤイシ) 大段 (オーダン) 通田 (トーリダ) 御殿処 (ゴテンショ) 棚 (タナ) 吉原鼻 (ヨシワラバナ) 日陰屋敷 (ヒカゲヤシキ) タショーバ |

| 【川合新田】 | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|------------|
| 鈴木 (スズキ) 塩原 (シオバラ) 三ノ割 (サンノワリ) | 小坪 (コツボ) 外荒 (ソトアラ) 内荒 (ウチアラ) | 惣境 (ソーザカイ) |

| 【上土新田】 | | |
|---|---|--|
| 安東新田坪 (アンドーシンデン) 上土ノ坪 (アゲツチ) 立石ノ坪 (タテイシ) 松下 (マツシタ) | 平ヶ谷 (ヒラガヤ) 沼上ノ坪 (ヌマガミ) 鬼ヶ島ノ坪 (オニガシマ) <聞きとり> 天神田 (テンジンタ) | 中荒ウラナシ (ナカウラ) 埠頭陣地 (フトージンチ) アケハナ |

⑤その他の川名、地名の由来

i 巴川の名の由来

麻機を含む低湿地を蛇行緩流する巴川は、いわゆる沼付き村々を「水腐村々」と自称するほどの水害をもたらし、沼と川の水は、村々の禍福両様、村の人々の生活と密着している。

巴川の由来は形や流れ、3つの川が合流によることが起因などがある。

a 駿河新風土記（新庄道雄著）

屈曲蛇行している形容から巴川の名の起源としている。

b 駿河巡見帳（元禄16 1703年）

目付三島清左衛門の記録によると川の流れ模様によって呼び名となった。

c 新風土記

古くは、「巴川」という名の記述はなく、「江尻川」の名は記述されている。

源を千代田村浅畑沼に発し、東南に流れ、有度に至り、吉田川と会いし、長尾川を合わせ」（安倍郡誌）とあり、本流と吉田川、長尾川が合流の三つ巴より、巴川の名が起因した。

ii 川に関係する地名

巴川流域には、川の特徴を示す「イカリ」の地名が特に多い。

河川の近くや低地には決まって「イカリ」の地名がある。「イカリ」は、灌漑用の水量を調節するため、堰に設けた水門のことも言うが、イカリ水とは水蒿が増えて溢れ出た水のこと。川合では、イカリを伊賀利と書いている。

iii 水運等に関わる地名

巴川が、有永と南に分かれて、草場（南）の川と合流する辺りを、三ツ又と言った。それが三津又（南）で、舟着場である。巴川支流の七曲り川も、低地を流れていたから、ひとたび豪雨となると、流路は、水勢に委せて自由に曲がったから七曲がり、その隣が川原尻（南）となる。巴川最上流の舟着場が八津口（南）で、水運の要衝であった。ここに舟止（ふなと）の名が、今も残っている。

中荷土場（浅畑沼新田）は、小沼川支流の舟着場。波止場、波止場中（上土新田、下足洗新田、川合新田、請新田）の名がある。

iv その他の地名

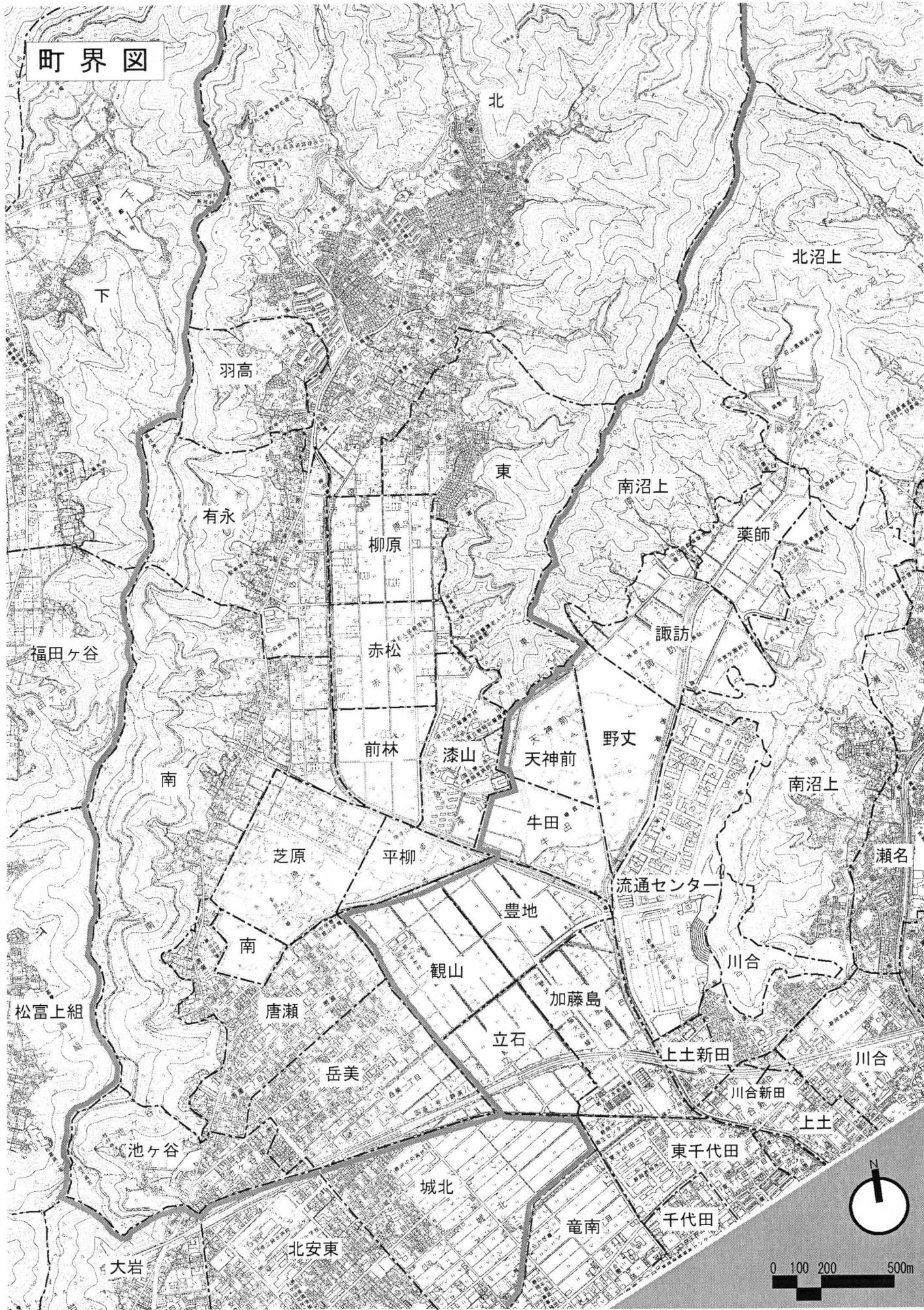
土地が流されてしまったから、外荒（川合新田）長尾川の水が流れ込んで、田が荒らされたので内荒（川合新田）の名がある。

草場（南）は海拔僅かに7mで、草が生い茂っていたのでその名がある。

上土方面から賤機方面へ行くには、竹林寺坂を越さなければならない。昔、駄馬がこの坂で足を踏み外して、谷底へ落ちたので牛轉（南）となった。

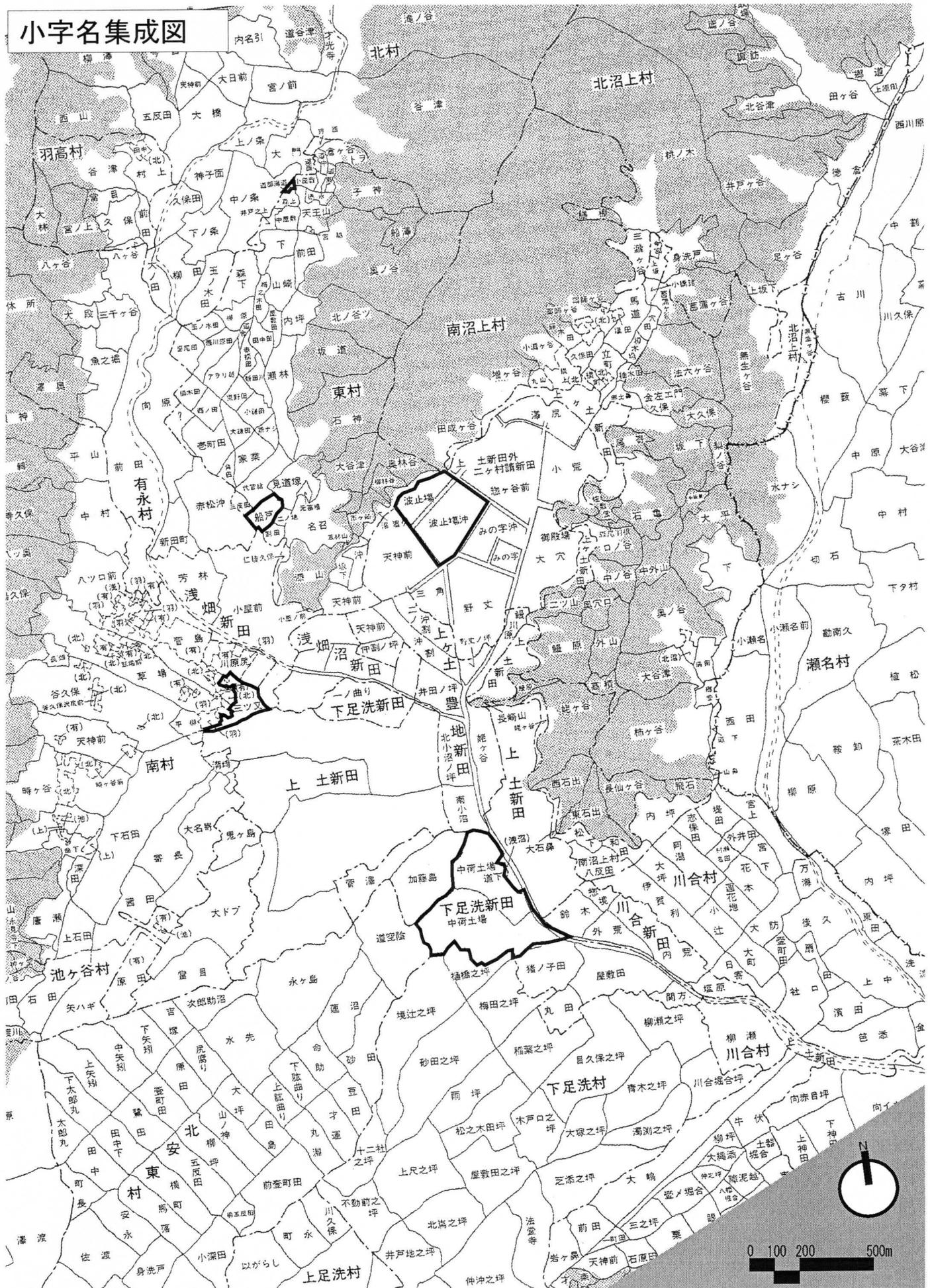
（資料：静岡市の大字・小字名集成 江戸時代より現代まで）

町界図



凡例 一-- 町界

小字名集成図



凡例 交通関連の字名

資料(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要Ⅲ 1990

(2) 伝説・民話・昔話

【麻機地区】（資料：①記念誌 大谷放水路、静岡の文化71号 ⑬記念誌 大谷放水路、②～⑬麻機誌）

①沼のばあさん怪物と刺し違えた「沼のばあさん」という伝説

むかし、麻機に石橋という屋号の家があった。ある日、石橋のばあさんが孫娘を舟に乗せ、沼で子守をしていると、突然カッパが現れ孫娘をさらってしまった。どうしても仇を討ちたい、と思ったばあさんはジャ（蛇という字をあてるが、実際は竜を意味する）に変身して水に入り、とうとう仇をとった。

ところが、再び人間に戻れず、かといって成仏もできず、ばあさんの心を持ったジャは苦しみ続けた。そんな時、大正寺の和尚さんがたいそう立派な方であることを知る。ジャは、人間に化けて和尚さんを訪ねた。和尚さんはすぐに正体を見破り、「汝の正体はわかっている。直ちに姿を現せ」と一喝した。すると、たちまち大雨が降り出して寺の庭は池のようになり、その中でジャは本堂を七廻り半回った。やがて水の引いた跡には、大きなウロコが4枚残されていた。おばあさんはやっと成仏できたのである。

よく似た話が麻機の伝説として伝えられている。話はもっと具体的で、時代は南北朝、登場人物も歴史的に名のある人である。麻機の話には大谷とのつながりを示す部分はないが、大谷の方の話では、主人公の家すなわち石橋は、大正寺の檀家であるという。

現在何のつながりの無い麻機沼と、大谷の大正寺に同じような話があるのかわからない。

（資料：記念誌 大谷川放水路）

この伝説は、麻機沼と大谷川とつながっていた推測の根拠となるのではないだろうか。話の核となるのはジャである。ジャとは無理に漢字をあてれば蛇であるが、たとえばシマヘビとかマムシといった具体的な蛇のことではなく、実質は竜と同じ水の神あるいは水そのものの象徴である。東南アジア各地ではナガという神に対する信仰が盛んであるが、これは常に蛇の姿で表現される。

ナガを鎮めることは水を制御することである。これが日本ではジャと言われる水の神の正体である。沼のばあさんは河童に復讐するためにジャに変身したことになるが、じつは変身したばあさん自身が洪水を引き起こす水の神だった。水の神つまりジャが行き来するためには通路としての水が必要である。一見何の関係もないように見える大谷に麻機沼の水神が出現したということは、昔は大谷川と麻機沼とがつながっていたことのかすかな名残りではなかったかと想像される。

（資料：静岡の文化71号 麻機沼の水のゆくえ）

②むじな和尚

昔、鎌倉建長寺の偉い坊さんが、大勢の弟子をひきつれて修行の旅の途中、北村の名主、保崎孫右衛門の家に泊まることになった。ところがこの坊さんはおかしな人で、食事の時には、おぜんを囲むように屏風を立て回し、部屋のふすまもぴっちり閉じて、「よいというまで、だれも近づくなぞ」と、ひとりで食べていた。

あくる朝になると、この浅畑から安倍川の渡し場まで、通り道に沿った村々では、決して犬を放してはならぬ、というお触れを出した。さてさて、何と犬の嫌いなお方だと、それでもお触れを回したおかげで、どうやら安倍川の渡しまでは犬にあわずにすんだのだが、安倍川を渡り、丸子の宿にかかるあたりで「白のいちもつ」と呼ばれる評判の大犬がおそいかり、とうとう坊さんをかみ殺してしまった。なんとしたことと、人々がかけつけてみると、そこには一匹のムジナの死骸が、血を流して横たわっていたと言われる。

ところで、この坊さんを泊めた保崎さんのお宅には、このむじな和尚がお礼に書き残していったという掛軸が伝えられている。

③きびたの五郎左衛門

有永から北村や東村に至る喜尾田道は、途中の大川沿いにある猫どん淵があることで、あまり気持ちのよい道ではなかった。

猫どん淵は、青くよどんだ水がじっと静まりかえっていて、それだけでもけっこう不気味なところへ、岸辺の草のかげに腐りかかった小猫の死骸が浮いていることがしばしばあって、通る人をぎょっとさせた。近くの村で、猫の子が生まれると始末に困って、みんなここへ投げこんでいったためであった。

そんなわけで、喜尾田道は、昼でさえうす気味悪い道だったが、その上、夜になると、今度はごろざえもん狐が姿を現わした。

ごろざえもん狐というのは、通りかかる人にいろいろと悪さをするので、このあたり一帯では評判の雄ぎつねであった。「いい湯だな」とごきげんでつかっていたのが、実は、野原の肥溜めだったり、ふろしき包みのごちそうが、いつの間にか石ころに変わっていたり、一晩中、同じところをぐるぐる廻りさせられたり、というのは、みんなごろざえもん狐のしわざだった。

さて、乱暴もので知られた村の鬼蔵は、このごろざえもん狐を生け捕りにして、みんなを驚かせてやろうと、ひそかに機会をねらっていた。今日こそは、と心に決めたその日、夕ぐれを待ちかねた鬼蔵は、喜尾田のほのかに白い道を、一步一步踏みしめるように歩いて行った。陽が落ちた後は、急にすず風が立って、螢がつつと目の前をよぎる。喜尾田の土手にさしかかった時、鬼蔵は思わず「オッ」と声をあげて足を止めた。暮れなずんでいゝ土手の上を、白い人影がゆれるようにこちらに近付いてくる。「しめた、これはおあつらえ向きだ」鬼蔵はひとりつぶやくと、またずんずん歩き始めた。道にかぶさる雑草が、足もとでパサパサと鳴る。鬼蔵はそ知らぬ顔でまっすぐ歩いて行く。

白い人影は闇に浮いて、目の前に迫った。顔を伏せているので表情はわかりませんが、どうやら若い女のような身のこなし。鬼蔵はすれ違い様、いきなり女の手首をつかむと、頭ごなしにどなりつけました。「やいやい五郎左衛門、おれは音に聞こえた有永の鬼蔵だ。もうこうなったら観念して神妙にしろ」「なんだねお前さん、いたいじゃないか、そんなに強くつかんじゃあ」という声に驚いてみると、その声はまぎれもなく女房のおさよ。

「お前さんが五郎左衛門にだまされるといけないと思って、迎えに来たのに」

「なんだ、そうか」と思わず手を離れた鬼蔵の前で、おさよの姿はふっと消えた。

「しまった、してやられた」と鬼蔵のくやしがりようはひととおりでなかった。

腹のおさまらない鬼蔵は、あくる日、また喜尾田道を出て行くと、この日も土手の榎のあたりに人の気配。しめたと近よってみると若い尼さんの姿だった。

いきなり飛びかかった鬼蔵は、用意の縄でたちまち尼さんを縛り上げ、「やい五郎左衛門、こら五郎左衛門」と叫びながら、縄のはしで尼さんの顔といわず身体といわず、ぴしりぴしりと打ちすえた。きのうのくやしさが、その音と一緒ににはじけ散った。いつとき、夢中になって打ち続けたが、ふと気付いてみると、尼さんは、声もあげず倒れもせず、黙って打たれていた。

へんだな一

鬼蔵は、はずんだ息をおさえながら、尼さんを闇にすかしてみると、なんとそれは衣を着せかけた榎の幹だった。

④琴弾きの松

有永山の頂上に福成権現のやしろがあった。

昔、このやしろで有永の衆と、向こう側の下村の衆がばくちをした時、有永の衆が負けてしまい、そのかたにこのやしろは下村にとられてしまったと言われている。

この福成さんには何百年も経たと思われる松が六本あったが、だんだんに枯れ、とうとう一本になってしまった。ところで、この松の大きく枝を張ったその梢の方から、琴を弾くような音や、笛・太鼓のような音が聞こえてくる夜があった。人々は、これは神様が集まって遊んでいるのだとか、いや、これは天狗さんに違いない、などとうわさしあった。

ある日、下村の旧家稲葉家の下男が、朝早くこの森に薪を取りに来て、小さな太鼓が落ちているのを見つけ、持って帰って、子供のおもちゃにしていたのですが、これが、いつかふっと見えなくなってしまった。

この松は、はるか駿河湾からもよく見えて船乗りたちはこれを目標にしてまっすぐ進むと、清水港に入ることができたと言われている。

残念なことに、こうしたいくつかの語り草を残した最後の一本も、太平洋戦争のさなかに枯れてしまった。

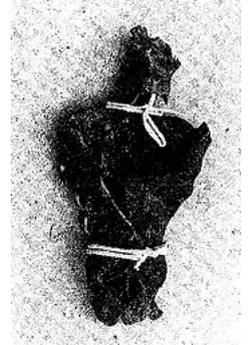
⑤きつね落しの毛皮

麻機が一番奥まった奥池ヶ谷という所に、たいへん鉄砲の上手なさきじいさんが住んでいた。

このあたりは、いくらさつまいもなどを植えても収穫のころになると山の獣に荒されて、里人は貧しい生活を送らなければならなかった。

ある日、さきじいさんは、いつものように鉄砲をかついで門屋との間の山の尾根のあたりを歩いていると、向こうの笹やぶがガサッと動いた。さきじいさんの鋭い目は、それが狼であることをたちまち見ぬいていた。「日頃、畑を荒すのはこいつに違いない。目にものみせてくれるわ」見事一発でしとめたさきじいさんは、応援を頼んで、二人がかりでこの狼をひきおろした。その時、もう一頭の狼が、悲しそうに鳴きながら見え隠れにどこまでも後を追ってきた。それからというもの、夜になるとこの狼がさきじいさんの家の回りに現れ、恐ろしくてとても外に出られないような晩が一週間も続いたと言われています。

ところで、この狼の毛皮は、さきじいさんの家に大切にしまっていました。いつの頃からか、これが獣つきを落すのにとてもよいと言われるようになった。この毛皮を借りて、ふとんの下に入れておくと、たちまち獣が落ちると言われ、これが評判になると、「ぜひ貸してください」と言う人が次々と現れて、西へ東へ大活躍だったと言われている。（今でも皮の一部と、ミイラ化した頭の一部（右写真）とが杉山寿夫さん・剣持勇さんのお宅に伝えられている。）



⑥池ヶ谷の天白

駿府城の回りには、七つの天白と八つの天神を祭って城の守りとしたと言われている。池ヶ谷字石田にも、昔天白と呼ぶ場所があった。ここには松と杉が一本ずつ生えていて、その根方に、小さな石のほこらがあって、これが天白様と伝えられている。

昔は、ここに旗を立ててお祭りをしていたため、明治の末頃までは、天白めぐりといって、この七天白を順にお参りする人たちもあったと言われている。

今では松も杉も枯れてしまったが、新しく松を植えて、ほこらは今でも大切に守られている。（池ヶ谷二四二番地森崎甚太郎氏宅内）

⑦女ヶ谷

窪街道を西南に入った谷間を女ヶ谷と呼ばれている。

その名の言われは、ここに女小屋が建てられていたためである。昔は、女の人が生理になると、けがれていると嫌って、家へよせつけませんでした。そういう時、女の人たちは村の女小屋に移って、共同生活をしながらその時期が過ぎるのを待ったのです。そこでも、のんびり遊んでいたわけではなく、藁細工や裁縫などに忙しかったと言われている。

羽高では八ヶ谷にあったといい、「部屋の上」という地名は、そのなごりと伝えられている。

⑧肥付石

東の山を少し登った茶畑の中に、坊主頭のような形をした高さ1mばかり、回りは3m近くもある石が建っていました。

ところでこの石は恐ろしい毒石で、うっかりさわったりすると足がはれあがる不思議な病気にかかる。この病気は「こいはち」と呼ばれているが、高い熱がでてからだはぶるぶると震え、食事はのどを通らず、どんな薬も役に立たない。治す方法はたったひとつ。それは針金で鳥居を造り、この肥付石にそなえて祈るのだと言われている。

元治元年に麻機村の村々から役所にさし出した文書の中にも、にわかに寒けがしてひどい熱が出、片足がまたからくるぶしまで太くはれあがり、歩くこともできず、半年もわずらっている者が多いと記されている。

こんな話も伝えられている。竜爪山は尊い山で、この山から流れ出る水は、善人のためには長生きの薬となり、罪の多い人には毒となってこの病気にかかるのだと言われている。片足がはれるばかりか、手足ともにはれあがる「四ツ足こい」、身体中がはれる「身こい」などもあったと言われる。

肥付石は、今では山の下に移されて、道の傍に無責任な顔をして、ぼつねんと建っている。



⑨お泊まりさん

明治維新を迎え、江戸幕府が滅びて、代々将軍職にあった徳川家は、大名に格下げされてしまった。新しく、明治政府から与えられた城は、古くから徳川家にとってゆかりの深い駿府城（静岡）。城主徳川家達は幕府時代の大勢の家来を引きつれて、この駿府にのり込んで来が、それだけの人を泊める場所に困り、とうとう駿府やその回りの村々のお寺などを開放することになった。

明治元年5月27日、井宮の役所からあさはたの村々にあてて、一通の命令書が届きました。南村の竹林寺と永見寺、有永村の聖樂寺、東村の東林寺を旅宿にするから、そのつもりでいるように、というものであった。

移って来たのは、高1000石の山崎四郎左衛門、700石の佐々木源四郎、300俵の石野健之助、250俵の若林誠三郎、200俵の岡本二郎と、その家族たちでした。このうち山崎・岡本・若林の三氏は年が明けると遠州への移住を命ぜられて村を去り、石野・佐々木両氏も寺を出て、南村の万治郎の家に身をよせることになって、不便な生活をしのいでいた。こうしたなかで佐々木源四郎は病を得、とうとうこの仮の宿で二十三歳の命を落した。

明治維新の荒波の中で、ひっそりと散っていった若い生命は、今も観音山の墓地に葬られている。

このように、徳川家に従って駿府に移って来たお武家衆を、駿府の人たちはお泊まりさんと呼んだ。

⑩鈴石天神

東の山を、100mほども登ったところの森の中に、大きな石がどっしりと腰をおろしています。高さは約6m、幅は4mほどもあり、表に小さな穴が二つ、横にも30cmほどの穴があいていて、その穴にお金を入れると、七日七夜鈴の音が響いていたというところから、鈴石天神と人が呼ぶようになりました。

これは、あさはた七天神のひとつに数えられていましたが、明治10年に、天神さんは日賀美神社に移されて、ここにはこの大石だけが残されました。今でも毎年10月15日になると村の人たちが大石の所にでかけて行って御神酒を供え、太鼓を打って、ささやかなお祭りをおこなっています。大石にあいた穴もいつか埋まってしまい、鈴の音を聞くことができなくなっているのは残念なことです。

⑪力石

有永大御戸神社の石段下に、土止めに使われている、丸い棒のような石があります。今は目をとめる人もいませんが、この石にはちゃんと名前もあり、五十年ほど前までは、この石をとりまいて若者たちが歓声をあげていたのです。

この石の名は力石、またの名を元禄石といいます。石の胴のところに、「元禄一六癸未年三月吉日」と文字が彫られているため、こんな名がついたのです。直径23cm、長さ56cmほどの石の棒で、重さが68.6kgといますから、体格のよい男の体重ぐらいというわけで、形といい重さといいちょうど手ごろだったのでしょう。いつの間にか、若者たちの力くらべの石ということになって、頭の上にさし上げたり、肩にかついたり、いろいろ力を競いあったのです。



今は静かに眠っているこの石には、若者たちの汗と熱気がしみ込んでいるのです。

⑫おたつ火

有永あたりから見ると、たんぼを隔てた真正面にぼっこりとした漆山を望むことができました。そしてこの漆山の東南には、あしや荻の生い茂る浅畑沼（大沼）が広がり、漆山の西北には、同じような葦やまこもの生える小沼が静まりかえっていました。

ところで、この小沼の上に、不思議な火があらわれるのです。それは毎年田植時分の初夏の頃、それも、日が沈んで間もない頃から約一時間という限られた時間にしかみられないのです。赤い色の火がぼっかりとあらわれたかと思うとすっと消え、またあらわれたかと思うとそれが二つに分かれて高く、低く、すばらしい速さで左へ走ったとみるうちに、ふっと中ほどにあらわれた火はゆっくり右へ流れていくといった具合で、漆山のつけ根にあった切通しのあたりから東村の山崎あたりにかけて、自由自在に動き回るのでした。

村ではこれを「おたつ火」と呼んでいましたが、その名前のいわれもはっきりしないまま、昭和5、6年頃からはぷつりと姿を見せなくなってしまいました。今では、大沼も小沼も見わたす限りの水田となり、漆山も切り崩されて、おたつ火のことも、知る人はたいへん少なくなっていました。

⑬日本武尊伝説

景行天皇の皇子である日本武尊が東夷征伐にあたって、麻機（まが）の山辺の道（現在の麻機街道）を通ったと言われている。日本武尊が有永で水浴びや馬に水を与えるなど、しばしば休憩したことから「皇の池」の地名が残ったと推察されている。

「皇の池」は、現在みかん畑となっているが、有永地区にある聖楽寺の北側へ70~80mほど先の魚の堀春屋（うすつき）の窪の突き当たりの場所にあったと言われている。江戸時代から明治の初めにかけて、この場所は、「大ノ堀」と呼んでいた。

（資料：麻機誌）

古代史の最大の英雄といえば、だれもが日本武尊（ヤマトタケル）の名を挙げる。父の命令を受け、西に東に軍勢を進めて朝廷に対抗する地方の有力者を討つが、最後は山の神の怒りにふれて悲劇的な死を迎え、白鳥となって飛び去る、という物語はロマンにあふれている。これは、大和朝廷の全国統一過程で活躍した多くの武人たちのすがたを、一人の英雄に凝縮したもの、と考えられている。ヤマトのタケル、すなわち、大和の勇者というわけである。

その時代、静岡・清水あたりは蘆原（いおはら）と呼ばれていた。たぶん、独立の気概にあふれた豪族の支配下にあった。ヤマトタケルとの戦いは、中央の侵略に対する地方の抵抗、と位置づけられよう。その戦略が、タケルを野原に誘い出しての火攻めであった。一見卑怯な手段に見える。しかし、タケル自身、ある時には女に化けて敵を油断させてだまし討ちにしている。隙をみせた方が負けなのだ。

さて、火にかこまれたタケルは、遠征に出る前、姉から渡された火打ち石を思い出す。あたりの草を薙ぎはらい、迎え火を放って窮地を脱した。これにちなんで、そのあたりを草薙、と呼ぶようになった。草薙神社前のタケルの像は、この話を象徴したものだ。もっとも、あたりを焼いたので焼津というのだともいわれ、焼津市の焼津神社にもタケルの像がたっている。

どちらが正しいのか、という議論はあまり意味がない。そもそも主人公が架空の人物なのだから。それよりも、このあたりが舞台になったのはなぜか、という方が大切だ。それは、おそらく古代において、西から東国に向かう通がここを通過していたからだ。幹線道路としての東海道が正式に設置される前から、ここは交通の要衝であった。おそらく、巴川も、長尾川も、そして大谷川も、まだ独自の流路も名前もなく、丈高く繁った葦原の間を気ままに流れていたのだろう。

（資料：記念誌 大谷川放水路）

【千代田地区】

●自然伝説

①千代田の名称と起源

千代田の地名は明治22年に一町一箇村が合併して千代田村が成立した折につけられた。また、現在の千代田町は昭和三年に大字下足洗が改称したもの。その起こりは、徳川家康が駿府在城の頃、当地に鷹狩に来て一面の水田を見、千代の郷と称したとの口碑による。

(資料：千代田村誌)

②龍爪山の山名の起源

昔、夏雲に乗って一寵が天下り、誤って木の枝に足を引っかけて爪を落とした。それを土地の老人が拾ったことから、この山を龍爪山とよぶようになったと言う。

(資料：千代田村誌『駿河記』)

●歴史伝説

①十二艘川

千代田の田所の北側を西から東に流れる川がある。人よんで十二艘川と言う。昔、駿府城を築くときに石を運んだといわれる。あるとき、浅間神社の石鳥居の笠石を運ぶのに十二艘の船を並べたのでこの名があると言う。今の流通大橋の上流の所で転覆し、笠石を沈めてしまった。子どもの頃に、竹竿で川の底を突くと先に当たるものがあった。

(資料：千代田誌 寺尾英一氏談)

②川合の水神様

川合の産土神・神明神社の境内に水神様がある。昔、日本武尊が東征のみぎり、この辺を通りかかったときに、喉の渴きを覚えた。

この辺に水が見当たらないので、佩^はいていた剣で地を突いたところ、たちまち泉が湧き出した。これが水神様の起こりである。

水神様の水はどんな旱天にも涸れることがない。ただし、明け方から朝日の昇るまでの間、水の色が茶色または緑色に変わることがある。それが数日間以上も続くと、何か変事が起こるとされ、地中に潜んでいる龍がそれを知らせてくれるのだと信じられている。そう言うことが何度かあって、大正3年の静岡大洪水や、昭和初年の伊豆地震にもこう言う現象があったと言う。

古老のなかには朝早く起きて、水の色を見にいったと言う人もある。

(資料：千代田誌『静岡県伝説昔話集』・草谷ゆうさん談)

③道白平

北沼上字則沢の奥、能爪山魂のなかに道白平とよばれるところがある。ここは天文年間に道白禅師が修行した場所であると言う。道白には祖益と言う弟子が一人あった。

祖益はある日托鉢して駿府の中世領主今川義元館にはいり、奥女中の小萩を見てたちまち恋慕の心が起こり、ついに鯨ヶ池に身を投げた。小萩も暇を出されて野田村に帰った。

ある日、道白のもとに一匹の牛がやってきた。それは祖益の生まれ変わりであったので、側において府中まで使いにやらせていた。

牛は夜な夜な野田村の小萩のもとを訪れ、夜を明かしては山に戻った。小萩もこの牛をいたわり、生涯牛の妻としてすごしたので村の名を牛妻村とよぶようになったと言う。

道白はその後、清水の奉行土屋なる人の頼みで、庵原郡有度村馬走(旧清水市)に楞^{りょうごん}厳院を開いたと言う。ちなみに創建は弘治元年(1555)のことである。

やがて牛が死に、村人たちが道白のもとへ運ぼうとして途中で一休みすると、その場で石と化してしまった。それが高部村(旧清水市)の午谷山桃林寺の牛石であると言う。寺

号は中国の「牛を桃林に放つ」と言う故事からとったものだという。道白平には五輪塔や岩穴、そして大銀杏がある。

(資料：『駿国雑誌』「千代田村誌」『静岡県伝説昔話集』)

④けらはこの松

沓谷の竜雲寺の側から蓮永寺七面山へ通ずる山道がある。その途中にある松の大木をけらはこの松と言う。

昔この松の木に一對の鶴が巢を営み、雌鳥が卵を抱いていた。この雌鳥を当時の沓谷村の庄屋某が鉄砲で撃ち落として、家路についた。すると雄鳥が庄屋の頭上を舞いながら家までついてき、やがていずこへともなく飛び去った。

その後、床屋の家には不幸が続き、まもなく破滅してしまったと言う。

(資料：千代田誌 望月仲太郎氏談)

●信仰伝説

①姥神社

浅畑村はその昔周囲4kmの大池で満々と水を湛えていた。この沼の主は姥の化した龍で、姥神として祀られ、浅畑沼畔に鎮座する諏訪神社の源をなしている。

後醍醐天皇の御代、建武年中(1334~5)に、新田義貞の弟脇屋右衛門佐義助が駿河国の守護に補されて当地に滞在中、瀬名村の長の娘小菊が仕えたことから義助の寵愛するところとなり、その任地に伴われた。その後、新田の威勢が衰えたので、小菊は懐妊の身ながら郷里に帰って女の子を産み、三日後にむなしくなった。母なる姥は小菊にかわって孫娘小葎を養育した。さすがに貴人の胤だけあって、小葎の器量は人に勝った。

観応二年(1351)の夏六十余歳の姥が暑気にあたって病の床に臥した。小葎は平癒祈願のため早朝に沐浴して浅間神社にお百度をふんだ。ある日のこと、川合の渡しを船で渡らんとしたときに、巴川の河童に魅入られ、水底に引込まれてしまった。供の者が大声でよんだので、近所の里人が集まって探した。その日の夕方ようやく汀の穴にいるところを発見しておかに引上げてみたところ、河童の仕業で五臓がことごとく抜取られていた。

ことの次第を姥に告げると、姥はその夜浅畑沼に臨み、「われは沼に身を投げて後、龍女となり河童を退治して未来永劫この沼の守護神となり、災難を救うべし。また、わが娘親子菩提のためこの沼より一千人の食物を出し、諸人の飢えを助くべし。わが願いを成就して後必ず菩薩の地に至るべし」と誓願して入水した。果たしてその後河童による被害がなくなり、蓮のような霊草を生じた。鞠のような実を割ると櫻の実のようなのが108ずつある。これを糸に貫いて珠数とするので法器草と名づけた。また、この実は食料ともなり、百姓の飢えを助けた。沼の魚を捕り、菰を刈って世渡りする人などもあった。姥神の慈悲を感じて、村人たちは年々沼辺で追善の大施餓鬼を営み、流灌頂ながれかんじょうをおこなった。

その後、応永年中(1394~1427)に有渡郡大谷村(旧静岡市)にある瑞現山大祥寺に行之和尚によって血脉を授けられ、姥神となった。後年、この寺にきた和尚が信濃の生まれである縁によって、姥神諏訪大明神とあがめ、寺の鎮守として祀った。

(資料：千代田誌 『静岡県伝説昔話集』「大安寺寺伝」)

②先 宮

昔、諸国が早魃のとき、人々は大いに難儀し、天に祈り地に伏して雨を願っていた。ある日少女が現れ、小池の辺にたたずんでいる農泉に告げた。「われは明神である。国内を巡行して万民を助けているものである。いまより三日を過ぎさずして雪がわき雨が降るだろう。

その方は正直なるによって、これを授ける」といって榊の葉を賜った。農夫が一心に祈ると、たちまち雨が降って田畑を潤した。

それで人々がその神徳を仰ぎ、上足洗郷濯沢に社を造営して祀った。

また、ある夜、神錫を携えて市中の酒屋にきて酒を求める者があった。およそ一升ほどやすやすとはいったので、これを怪んであとをつけたところ、当社にはいったので酒解神社と呼ぶようになった。

(資料：千代田誌)

③川合神明社

徳川家康斉将軍のとき、江戸城内紅葉山に化物が出て城内を荒した。その折に、小島藩の藩主松平丹後守が、退治の役を買って出て、化物と闘った。丹後守が危うくなってきたときに白髪の老人が現れて加勢したので、化物を退治することが出来た。化物の正体は古狸であった。その老人は丹後守の領内に鎮座の川合の押さまであった。その功により禄高を加増された丹後守は、川合神明のために社を造営した。

(資料：千代田誌『静岡県伝説昔話集』)

<昔話>

「静岡竜南の口承資料」(『女性と経験』第四号 昭和五十四年九月)

「竜南のむかしむかしー静岡昔話ノートから」(『あしなな』第一六六号 昭和五十五年二月)

いずれも東京在住の昔話研究家野村敬子さんの採録にかかわるもので、伝承者は当時南沼上在住の故川口タキさんと大村よしのさん

{郷土の言語伝承 明治二十四年八月生まれの川口さん}

●音話など

①桃太郎

婆が川で洗濯していると、桃が流れてきた。拾って食べてみると美味しかったので、爺にも食べさせたいと思い「も一つ流れてこい」と言うと、また流れてきた。桃を盟に入れて家に持ち帰った。爺が柴を刈って帰ってきたので、包丁を当てようとしたところ、桃が割れて男の子が出現した。子のない夫婦は桃太郎と名づけて養育した。

ある日鬼が島の鬼が里に現れて悪事を働くとすることがあった。

一人前に成長した桃太郎は婆に栗団子を持してもらって鬼退治に出掛けた。途中、犬・猿・雉子が家来になる。柴舟で島に渡り、鬼を退治し、宝物を持ち帰って村人に分け与えた。

②笠地藏

貧しい爺婆があった。正月になると言うのに餅を捻くことができない。一人で相談して網から糞を刈り取って、笠を作り、町方へ売りにいった。山道で雪が降り出した。ぐっしより濡れている六地藏のために自分の被っている分まで笠をみな被らせ、手ぶらで帰り、その晩は水ばかり飲んで寝る。

夜半に大きな物音に驚かされた。くぐり戸から見ると六地藏がたくさんの薪を積み上げている。そのなかに裏白い精米もあったので、餅を抱いて正月を迎えることができた。

③食わず女房

炭焼の男が山道で美しい女に適った。その晩、戸を叩いて「道に迷ったので一晩泊めてくれや」と言う。泊めてやると、そのままこの家に居付いて二人は夫婦になる。不思議なことにこの女はゴゼン(ご飯)を食わない。あるとき、山へいくふりをして様子をうかがっていると、釜いっぱいゴゼンを炊いて、頭の真ん中に放り込むようにして食ってしまった。男が姿を見せると、風呂桶のなかに無理に押し込め、背負って山へいく。途中木の枝にしがみついて桶から抜け出し、隠れて見ていると、女は谷へいき、「お前達にご馳足よね」

といって頭のなかからゴゼンを出して蜘蛛の子に与えた。正体が蜘蛛だと判って焼き払った。

夜、戸を叩くのは鬼蜘蛛だからだまされてはならない。

④舌切雀

爺婆があって、爺が山から持帰った雀の子をかわいがっていた。

婆が洗濯物を干しているとき、雀が糊をなめる。怒った婆は雀の舌を切る。雀は逃げてしまう。山仕事から帰った爺が探しに行く。

藪の中にもぐると雀の御殿があって歓待される。大小の葛籠つづらのうち、小さい方のをもらって帰る。なかには餅や衣装などが詰まっていた。

これを見て婆が欲を出し、葛籠をもらいにいって大きいのをもらう。

途中、なかを開けて見ると、蛇・百足・蜂が出てきて咬むやら刺すやらする。婆が泣き泣き家に帰る。

⑤こぶとり取り爺

顔にこぶのある止恒爺が山に柴刈にいき、雨に降りこめられて木の洞に宿る。まどろんでいるところに人声がして目覚める。鬼が酒を飲んでいるところであった。踊りのうまい爺は出て踊る。鬼は、こぶが踊り上手の証と思って取ってしまう。家に帰ると、やはり片方にこぶのある隣のおでい（悪賢い）爺が訳を聞いて山へいく。爺が下手に踊ると、返してやるとこぶをつけられる。おでい爺は両方にこぶをもうけてしまった。

⑥まのよい猟師

貧しい猟師が、破れ股引をはいて山へいく。兎を撃つといい按配に命中し、川へとぴこむ。猟師があとを追いかけて川にとぴこみ、後足を掴まえる。兎が前足で岸を搔くので、山芋が掘り出される。

岸にあがってみると、股引の破れ目から魚がたくさんはいていた。

こうして思わぬ獲物があった。

⑦時鳥と兄弟

二人の兄弟があった。兄は目が見えない。弟は山芋を掘ってきては兄に馳走した。目あきの弟はもっとうまいところを食べているだろうと邪推した兄が、弟の腹を割ってしまう。なかは空だった。神の答めがあって、「弟許せ、弟許せ」と口から血のあわをふいて八千八声鳴かぬと一匹の虫にありつけぬようになった。あるいは、お

盆の頃になると冥土から時鳥となって「弟恋し、弟恋し」と鳴きながらやってくると語る。

⑧鳶不孝丁

親不幸な鳶があった。親が右といえば左のことをする。そこで鳶の親は、「自分が死んだら、川端へ埋けてくれや」といった。

親が死んでやっと目が覚め、今度ばかりは親のいいつけを守って川端に葬った。水が出ると墓が流れてしまうので、雨が降りそうになると、鳶はピュルピュルと鳴き騒ぐそうなの。

⑨百足の使い

お釈迦様の病気が重くなる。百足は足がたくさんあるから早いだろうと言うわけで、医者迎えの使者にされる。到着を待ちかねて動物が様子を見にトマグチにいくと、百足が草履を脱いでいる。とみたのは誤りで、足が多いので草履をつけるのに手間どり、最後の一足を履いているところであった。みんながあきれて百足をびったりと押倒した。それで、体がびったんこになり、人目を避けるようになったそうなの。

（資料：千代田誌）

<千代田の民謡>

労作や儀礼などの際に民謡がうたわれてきた。時代の降るにつれてそれらの様式も変わり、村落共同体の性格や人々の意識も変わって、民謡はうたわれる機会がなくなった。かつては共同労働の場が多くあり、そのような場で唄を歌い、仕事を楽しんだ。婚礼や地突といった儀礼にも民謡は不可欠のものであった。

a 田 唄

(田植唄)

五月朔日泣く子が欲しや 畦に腰掛け乳くれる
今年世がよい穂に穂が咲いて 浜は大漁で魚の山

(草取り唄)

お前百までわしゃ九九まで 共に白髪が生えるまで
様は三夜の三ヶ月さまよ ちらりと見たばかり
暑い六月田の草取れば 忍び夜妻のことは思わぬ

b 麦藁唄

わしが出しますターハイダーハイ ナンダーヨーホイ
アゝゝゝゝ 若衆通うなら ターハイダーハイ
箆もてかーよーえ
もしやお一尋ねがあったら
七月七日の七夕さんだと ゆーてお一ぬーけー
なんと今夜の麦は 剥けたじゃないか
中で小糠がヒューヒュー デンデン テレスクテント
神楽舞じゃないか

c 春 駒

大正未ごろまでは時節を定めて祝言人がやってき、持前の芸をもって門付をした。

歳暮には節季候、初春には萬歳はじめ厄払・春駒などがやってきた。

現今も萬歳の訪れがある。

春駒はいつのころからか訪れがなくなったが、則沢のばあさんたちによって伝承されている。

山家にはばあさんを大切に作る風習があり、祝言やデブルメイなどの慶事には必ず招いて酒食のもてなしをする。ばあさんたちはお祝いとしてめでたい唄をうたったり、芸をしたりする。その一つが則沢の春駒である。

おかめの面を被って、馬の首形に跨るようにしながら舞い込み、唄をうたう。

春の初めに春駒なんぞ 夢に見てさえよいやと申す

ア ドンショー

お家ご繁昌と舞い込む駒は さても結構な名馬の駒よ

ホラ 奥州仙台津軽の浜から 金銀黄金をお馬に積み込むな ソレ

(資料：千代田誌)

<千代田の童戯とわらべ唄>

男の子の遊びには、チャンバラごっこ・メンコ・水鉄砲・竹馬・天下とりなどがある。また、女の子の遊びには毬突・オジャミといったものから、お手合せ・花いちもんめ・かごめかごめ・縄跳びといった遊戯がある。遊戯には男の子も参加するが、おもに女の子の遊びごとであった。女の子の遊びや遊戯はわらべ唄を伴っている。

a 遊び唄

凧 凧揚がれ 天まで揚がれ
夕焼け小焼け あした天気になあれ

蟻どんたかれ みんなきてたかれ

達磨さん達磨さん睨めっこしましょ
笑うと抜かす あっぷっぷ

ホ ホ 螢こい
あっちの水はにがいぞ こっちの水はあまいぞ
ホ ホ 螢こい

b 手毬唄

正月エ 障子あければ万歳が鼓や太鼓で歌の声 サア歌の声
二月エ にんじよまんじよの墓参りあしたは彼岸のお中日 サアお中日
三月エ 桜花よりひいなさま飾って見事な内裏さま サア内裏さま
四月エ 死んでまたくるお釈迦さま筍柄杓でお茶かけろ サアお茶かけろ
五月エ ごんごんばやりの前掛を正月しめよととつといた サアとつといた
六月エ ろくに田の草とりもせでお米がとれぬと腹を立て サア腹をたて
七月エ 質屋のお蔵は混雑であけたりしめたり流したり サア流したり
八月エ 蜂にさされた金玉をお匠著さんに見せたらとって投げた サアとって投げた
九月エ 草の中にも菊がある人が通れば目にとまる サア目にとまる
十月エ 重箱さげてどこへゆく私は恵比須講にお使いに サアお使いに
霜月エ 霜が降るやら凍るやら通る子どもがすべるやら サアすべるやら
師走とエ しわがよつたるばあさんがたくあんこうこうかみたがる サアかみたがる

ホーホケキョや鶯や またまた都へのぼるとき 梅の小枝に昼寝して あかさか婆さん
の夢を見て 夢を見たらかからんせ 十余人の小娘が キンランマンラン愛らしく
八千代の雪駄をチャラチャラと チャラリチャラリといくうちに こぜんのお山で足折
って 痛い悲しやおばあさま なにか薬はあるまいか おしろのおやきを手にとって
油でひねってつけたらば それでなおってしまった キンキン着物着せてやれ カンカ
ン簪を差してやれ 道で転ぶなつまずくな お馬がきたら脇へ寄れ お駕籠が通ったら
お辞儀しろ 手習子どもをかもうなよ かもうと草紙でぶたれるぞ サアぶたれるぞ
まずまずいっかん貸しました おめでたい 鯛 ^{ひらめ} 鯉 差しましようか せんさんまんさん
ご機嫌よう

c 人あて唄

坊さん 妨さん どこへいく
わたしゃ田圃の稲刈りに
わたしも一緒に連れしゃんせ
お前がいつては邪魔になる
このかんかん坊主 くそ坊主
後ろの正面 だあれ

d 手合せ唄

高い山から谷底見ればよ 瓜やなすびの花盛よ
アリヤヨイヨイ コリヤドンドン

わしが死んだら箱根の山へよ 埋けておくれ
わしゃ頼むよ コリヤドンドン

e 子守唄

お月さま幾つ 十三七つ
まだ年や若いに ねんねを産んで誰に抱かしょ
おちょぼに抱かしょ おちょぼ どこへいった
油買いに茶買いに
油屋の前で、こつて転んで油一升こぼいた
その油どうした
太郎さんの犬と次郎さんの犬と みんななめてしまった
その犬どうした
太鼓に張って あっちの山でドンドン こつちの山でもドンドン
ドコドン ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドンドコ ドン

ねんねんころりよおころりよ
坊やはよい子だねんねしな
坊やのお守はどこへいった
あの山越えて 里へいった
里のお土産なにもろた
でんでん太鼓に^{しょう}笙の笛
起上がり小法師に犬張子

子守やつらいもんだ 人目にや楽でヨー
親にや叱られる 子にや泣かれヨー
家が貧乏で 子守に出されヨー
正月ベンベが 欲しいからヨー
子守こもりと こばかにするなヨー
大閤秀吉も 元は子守ヨー

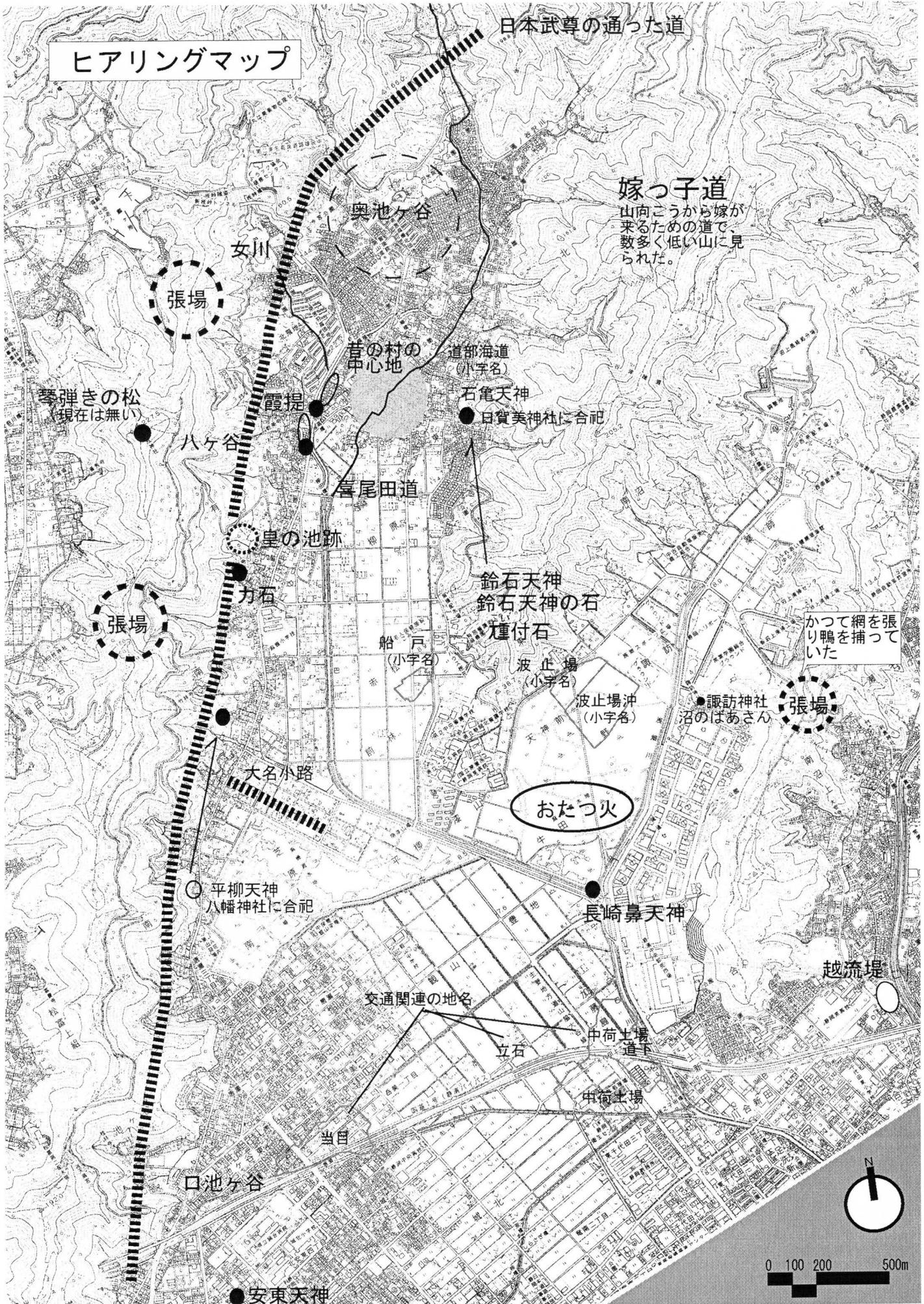
(資料：千代田誌)

ヒアリングマップ

日本武尊の通った道

嫁っ子道

山向こうから嫁が来るための道で、数多く低い山に見られた。



琴弾きの松
(現在は無い)

張場

女川

奥池ヶ谷

昔の村の
中心地

道部海道
(小字名)

石亀天神

日賀美神社に合祀

霞提

八ヶ谷

喜尾田道

皇の池跡

カ石

鈴石天神

鈴石天神の石

燗付石

船戸
(小字名)

波止場
(小字名)

波止場沖
(小字名)

かつて網を張り
鴨を捕っていた

張場

諏訪神社
沼のぼあさん

張場

大名小路

おたつ火

平柳天神
八幡神社に合祀

長崎鼻天神

越流堤

交通関連の地名

立石

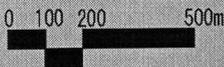
中荷土場
道下

当目

中荷土場

口池ヶ谷

安東天神



凡例 七所天神 (松下天神、平柳天神、麻機漆山天神、三杉天神、石亀天神、安東天神、長崎鼻天神)